宮城県文化財調査報告書第 118 集

── 愛子バイパス関係 ──

宮城町　観音堂遺跡
新宮前遺跡

昭和 61 年 3 月

宮　城　県　教　育　委　員　会
建設省東北地方建設局仙台工事事務所

序

近年の社会経済の発展は、人々に生活の向上と余暇の増大をもたらしました。そして、交通機能も時代の要請のもとにより広域化、高速化が求められております。その要求は、都市中心部から周辺部にかけてとくに大きくなっています。

仙台市中心部に流入する交通量は日を追って大きくなっていますが、四通八達の状態にあるわけでなく各所で支障があらわれています。

国道 48 号線は、山形方面と沿線途中の住宅団地から繰り出す車輌の増大により宮城町中心部から仙台市八幡町で慢性的な混雑と渋滞をきたし、朝夕はその度合いがとくに著しいものがあります。

建設省は、この交通渋滞を解消するため、仙台西トンネルと愛子バイパスの構想をねり関係機関との調整のうえに建設を進めることになりました。

仙台西トンネル(青葉山トンネル)は上り線(北側)がすでに開通し、下り線(南側)が現在工事中でありますが、このトンネルの開通により仙台市分の渋滞は解消され、その効果は高く評価されています。宮城町分の渋滞と安全の確保のための愛子バイパスの建設は、昭和 41 年から動きだし、宮城県教育委員会、宮城町教育委員会と建設省東北地方建設局仙台工事事務所の間で協議することから具体的なものとなりました。県教委は協議に基づいて、昭和 49 年予定法線上の文化財の分布調査を実施しました。その結果、6 遺跡が係り合いをもつことが判りました。その後、西館跡の保存をめぐり法線を一部北側に変更するなどの設計変更を行い、文化財ができるだけ現状保存が可能なように努力が払われました。

本報告書は、愛子バイパスの終点に近い宮城町下愛子字観音堂と上愛子字新宮前地区に所在する観音堂遺跡と新宮前遺跡の記録保存調査の成果をとりまとめたものであります。

この報告書が、研究者及び関係者のみならず、広く一般の方々に活用され、文化財に対する理解が一段と深かめられるよう願うものであります。

最後に、この調査に深い理解と多大の御協力をいただいた多くの方々に厚く御礼を申しあげるものです。

昭和 61 年 3 月

宮城県教育委員会
教育長　**郷　古　康　郎**

目　　次

〈観音堂遺跡〉
Ⅰ．調査に至る経過 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 1
Ⅲ．調査の方法と経過 4
Ⅳ．調査の成果 4
1．基本層位 4
2．発見された遺構と遺物 4
ａ．縄文時代 4
第 1 号住居跡 4
第 2 号住居跡 11
第 3 号住居跡 16
第 4 号住居跡 21
第 5 号住居跡 23
埋設土器遺構 28
炉　跡 29
土　壙 34
土製品 35
石　器 35
ｂ.平安時代 44
第 6 号住居跡 44
Ⅴ．考　　察 46
Ⅵ．まとめ 48
〈新宮前遺跡〉
調査の概要 51
写真図版 53

例　　言

1.本書は、愛子バイパス建設に係わる観音堂遺跡・新宮前遺跡の調査成果をまとめたものである。

2.調査の主体者は宮城県教育委員会、建設省東北地方建設局仙台工事事務所である。

3.本書における土色は「新版標準土色帖」(小川・竹原:1973)を使用し、土性区分は国際土壌学会法の基準を参照したものである。

4.この報告書に使用した地図は、国土地理院発行の宮城町管内図(5万分ノ1)である。

5.執筆編集は文化財保護課が行った。

担当者:観音堂・新宮前遺跡　　平沢英二郎、加藤道男、阿部　恵、真山　悟、阿部博志、今野　　隆

調査要項

遺 跡 記 号：観音堂遺跡　ＩＢ(宮城県遺跡地名表登載番号　21137)
新宮前遺跡　ＩＯ(宮城県遺跡地名表登載番号　21138)

遺 跡 所 在 地：観音堂遺跡　宮城県宮城町下愛子観音堂
新宮前遺跡　宮城県宮城町上愛子字新宮前

調 査 期 間：観音堂遺跡　昭和60年5月10日～7月31日
新宮前遺跡　昭和60年8月1日～12月27日

調 査 主 体 者：宮城県教育委員会　建設省東北地方建設局仙台工事事務所

調 査 担 当 者：宮城県教育庁文化財保護課
調査員　　阿部　恵・佐藤　広史・小山田正男・伊藤　裕・今野　隆

調査対象面積：観音堂遺跡　1050㎡
新宮前遺跡　7600㎡

発 掘 面 積：観音堂遺跡　1050㎡
新宮前遺跡　5000 ㎡

観音堂遺跡

Ⅰ．調査に至る経過

宮城県と山形県とを結ぶ幹線道路の一つ国道48号線は、宮城町上愛子から仙台市街地間で道路幅も狭く屈曲も多い。その上、周辺団地の開発の進行に伴ない通過車輌が増大しつつある。建設省は、交通安全の確保と渋滞の解消、地域住民等の利便と地域開発の発展を目的に、青葉山トンネルに続く仙台市茂庭字滝沢を起点とし、宮城町上愛子を終点とする総延長5.9ｋｍの愛子バイパスの建設を計画した。

昭和41年3月、ルートの都市計画決定が行われ、43年仙台市分の都市計画決定に一部変更が加えられた。46年と51～54年計画に基づいて建設工事のための調査が実施された、55年にはルートの承認が行われ、56年、事業に着手した。

文化財の分布調査は、協議により県教委が実施した。調査の結果計画路線上に遺跡が所在することが判った。中でも伊達政宗の寵姫五郎八姫の居住した西館跡の主要部が路線敷に含まれる事が判明したので、建設省、町教委、県教委の間で度重なる協議を行い、館跡の北端を通るルートに変更するなど文化財の保護の努力が払われた。

昭和59年11～12月にかけて観音堂遺跡の遺構確認調査を実施し、60年5～7月に同遺跡の記録保存調査を行い縄文、平安時代の住居跡6軒などを精査し、(一部農道部分は養生の上現状保存とした。)田地買収の進捗に合わせ、9月、12月新宮前遺跡の発掘調査を実施した。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

宮城町は、仙台市の北西部にあり、東西に長い町で、山形県と境を接し面積約258㎢(面積県6位)の町である。観音堂遺跡は、宮城町下愛子字観音堂に位置する。宮城町役場の南約100m、国鉄仙山線愛子駅から南へ約800mの地点である。新宮前遺跡は観音堂遺跡から約400m西側に所在する。

宮城町の地形を概観すると、西側は縦走する奥羽山地の山並が連なり、これから派生する七北田丘陵が北側を、青葉丘陵が町の南側を東に延びている。両丘陵とも標高約200mの定高性を示す丘陵である。七北田丘陵は大きく東進しながら複数方向に樹枝状の小起伏丘陵と分岐し、その中の一つが本町東部と境を接する仙台市折立地区に張り出し、端部には残丘性の権現森を形成している。青葉丘陵もまた東に延び権現森と対峙する西風藩山を形成している。この2つの山から延びる丘陵麓部が折立地区で接近し、広瀬川がここを出口としている。

関山峠を分水峰として東流する広瀬川は、途中新川と合流し、奥羽山地を解折する。大倉川を合わせる熊ヶ根、白沢付近では深い峡谷を形成しながら蛇行する。愛子地区に入ると芋沢川

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	観音堂遺跡	縄文(中)・平安	21	樋田遺跡	縄文・奈良・平安	41	花坂遺跡	縄文
2	新宮前遺跡	平安	22	蛇台原B遺跡	縄文	42	本郷館跡	中世
3	西館跡	中世	23	蛇台原A遺跡	奈良・平安	43	本郷遺跡	縄文
4	窯遺跡	奈良・平安	24	蛇台原C遺跡	縄文	44	満穂遺跡	縄文
5	館遺跡	奈良・平安	25	御殿館跡	中世	45	青野木A遺跡	縄文
6	弥勒寺の元享の碑	中世	26	樋田遺跡	縄文	46	赤坂遺跡	縄文
7	南館跡	中世	27	堰内遺跡	縄文	47	蒲沢山遺跡	縄文(前)
8	栗生遺跡	奈良・平安	28	新川遺跡		48	畑前B遺跡	縄文(早・前)
9	五輪塔遺跡	縄文	29	雷神B遺跡	奈良・平安	49	畑前D遺跡	縄文(前・中)
10	楝林B遺跡	奈良	30	雷神A遺跡	奈良・平安	50	畑前A遺跡	縄文
11	楝林A遺跡	縄文	31	車B遺跡	縄文・奈良・平安	51	高野原遺跡	縄文
12	楝林C遺跡	縄文・奈良・平安	32	平治遺跡	奈良・平安	52	西館遺跡	中世
13	二本松A遺跡	縄文・奈良・平安	33	車A遺跡	奈良・平安	53	馬場城跡(江城)	中世
14	観音A遺跡	奈良・平安	34	北原街道遺跡	縄文(前)	54	原館跡	中世
15	上町A遺跡	奈良	35	松原遺跡	縄文	55	弥勒寺の元享の碑	中世
16	上町B遺跡	奈良・平安	36	柿崎橋遺跡	縄文	56	郷六の建武の碑	中世
17	想海塚跡	中世	37	松原A遺跡	縄文	57	宇那弥神社跡	近世
18	補蛇寺跡	近世	38	下遠野原遺跡	奈良・平安	58	寺下館跡	中世
19	一本杉遺跡	縄文(後)・平安	39	下野遺跡	縄文(晩)			
20	榎遺跡	奈良・平安	40	中原遺跡	縄文			

を合わせ数段の河岸段丘を形成し、折立地区で狭隘部に達するまでに所謂愛子盆地を誕生させた。

本遺跡は愛子盆地のほぼ中央南寄りの広瀬川右岸の河岸段丘上に立地している。サイカチ沼から流れ出すサイカチ川が遺跡の南側の丘陵麓部を流れている。観音堂遺跡の標高は約113mで現状は水田である。しかし耕地整理前の古い地形図を検討すると、まわりより若干高い微高地が島状に現役場の方に続いていた。遺跡周辺は全体として西から東へ微傾斜を示すが、試掘のトレンチでは遺跡を中心として東側と西側に傾斜がみられ、とくに西側では県道秋保温泉愛子線に接する部分まで現地形とは逆傾斜を示すことがわかった。このことから遺跡は路線の南から北にかけて島状に連なる微高地の上に立地していると考えることができる。

〈周辺の遺跡〉

宮城県遺跡地名表によると宮城町内では、これまで141の遺跡が確認されている。これらの遺跡の多くは、愛子盆地内の河岸段丘や周辺の丘陵、台地に集中している。

旧石器時代の遺跡の発見は今のところ報告されていない。

縄文時代の遺跡は図示する範囲だけでも29遺跡、全体で75遺跡である。このうち発掘調査が行われたのは蒲沢山遺跡(宮城町教委:1983)、宮城広瀬高校建設に伴う農学寮跡遺跡(狩野・真山:1982)と東北自動車道関係権現森遺跡(阿部恵:1981)などがある。その他の遺跡を含め縄文の遺跡は、各河川流域の段丘上や丘陵状に分布している。

弥生、古墳時代の遺跡は明らかにされていない。

奈良、平安時代の遺跡は、愛子盆地の比較的低位の段丘土に集中して分布する。本遺跡でも1軒の住居跡が発掘され、新宮前遺跡でも若干の遺物の出土がみられた。また県営住宅建設に伴ない一本杉遺跡で住居跡の発見があった。(斎藤:1984)

中世から近世にかけての遺跡の分布をみると館跡が比較的多く認められる。その他数は少ないが板碑と塚などがある。

Ⅲ. 調査の方法と経過

昭和59年11～12月にかけて調査対象面積5,150m²に及ぶ観音堂遺跡の遺構確認作業を実施し、竪穴住居、埋設土器遺構、土壙等を確認、写真撮影、遺構配置図等を作成の上、翌年の本調査にのぞんだ。調査は昭和60年5月10日に開始された。調査対象区のグリッドは路線敷の中心杭No.433とNo.466を結ぶ直線を東西の基準線とし、それに直交する直線を南北の基準線として 3mのグリットを設定した。グリット名は東西をアルファベット、南北をアラビア数字で表わし、原点の東側をA区、西側をB区とした。

調査時において、地下水及び水田からの浸透水が常時遺構内を覆い、ポンプによる排水作業をしながらの作業で写真撮影、図面作成等の精査に困難をきたした。

一切の調査を終了したのは7月31日である。

一部調査対象区外に遺構が延びている部分については精査せずに現状保存とした。

なお調査の成果を一般に公開するために6月22日に現地説明会を実施した。

Ⅳ. 調査の成果

1. 基本層位

調査区の層位は4枚の層に大別される。

第Ⅰ層、厚さ約40㎝の黒褐色を呈する表土である。

第Ⅱ層、厚さ約20㎝の黒褐色を呈する砂質シルト層で、耕作土、床土にあたる。

第Ⅲ層、厚さ約40㎝の黒褐色を呈する砂質シルト層で、旧耕作土である。

第Ⅳ層、厚さ約15㎝の暗褐色を呈する砂質シルト層で、遺構確認面である。

2. 発見された遺構と遺物

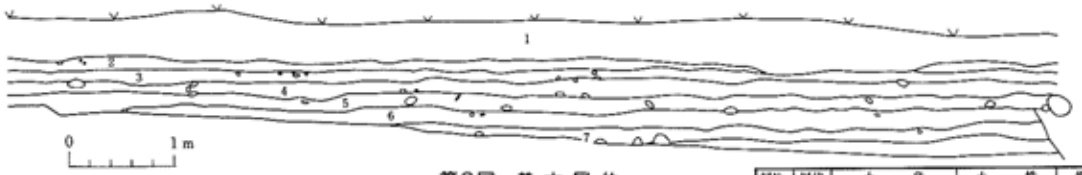
今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡6軒、炉跡2基、埋設土器遺構1基、土壙4基それにピットである。

a. 縄文時代

第1号住居跡

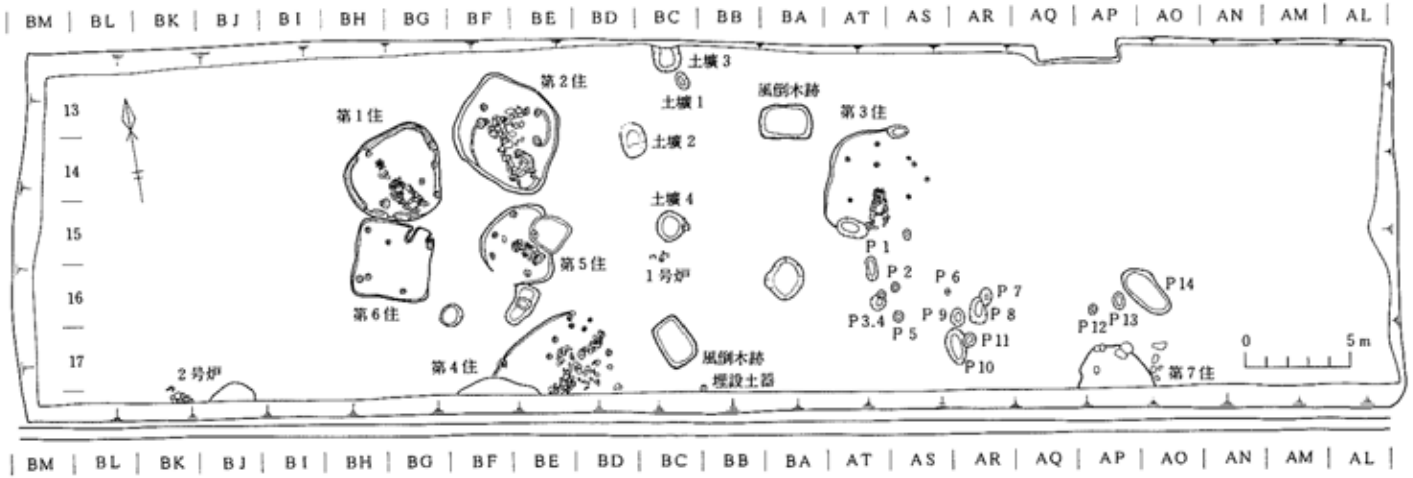
〔重複・増改築〕　なし

〔平面形・方向〕　調査区のBH・BG－14グリット付近に位置している。平面形は隅丸の5角形を呈している。径は長軸約4.5m、短軸約4.3mである。複式炉及びその延長線上にある第2埋設土器の主軸はNW方向である。



第2図　基本層位

層No.	層位	土色	土性	備考
1	Ⅰ	黒褐色　10YR 3/2	シルト質ローム	表土
2	Ⅱ	黒褐色　2.5Y　3/1	砂質シルト	耕作土
3		黒褐色　7.5YR 2/2	砂質シルト	耕作土
4	Ⅲ	黒褐色　10YR 2/2	砂質シルト	礫を含む
5		黒褐色　7.5YR 3/1	砂質シルト	
6		黒褐色　5Y　3/1	砂質シルト	グライ化した土
7	Ⅳ	暗褐色　2.5Y　3/3	砂質シルト	



第3図　遺構配置図

〔壁の状況〕　西側コーナー付近が削平されている他は全体に遺存している。床面から遺構確認面までの高さは、高い部分で、南側コーナーの約17㎝である。全体にやや急に立ち上がり地山を壁としている。

〔床面〕　面的に検出することができず、掘り方底面まで下げた。複式炉土器埋設部の石組の高さから復元すると、掘り方底面から3～4㎝高いレベルに床面があったと推定される。

〔柱穴〕　ピットは全部で10個検出された。このうちピット1は炉の長軸の延長線上にあり、長軸と対称の位置にピット3･4とピット5が並び、しかも深さが20～25㎝で一定することから主柱穴の可能性が強い。他のピットは補助的な柱穴と考えられるものもあるが明確ではない。

〔周溝〕　複式炉石組部の開口部を含め5ヶ所で途切れながらもほぼ住居跡全域にめぐっている。深さは掘り方底面より2～4㎝の深さである。

〔炉〕　炉の主軸NW-SEを示す。長軸約2.2m、短軸約1.1mである。土器埋設石囲部が住居の中心からやや南側に位置し、石組部は住居の壁付近までのびている。形態は底部を欠く土器(深鉢)を倒立し埋設した土器埋設石囲部、敷石石組部、石組部の3つの部分からなる土器埋設石組複式炉で平面形は「コ」字状を呈している。構築法は掘り方を掘り(土器埋設石囲部と石組部の前後関係は不明)底部欠損の土器を埋め、敷石石組部、石組部の順に構築している。奥壁や側壁の板状の石は熱変のため粘土化してもろくなっている。炉の長軸の延長線上には石囲部を有する土器が埋設されていた。

〔出土遺物〕

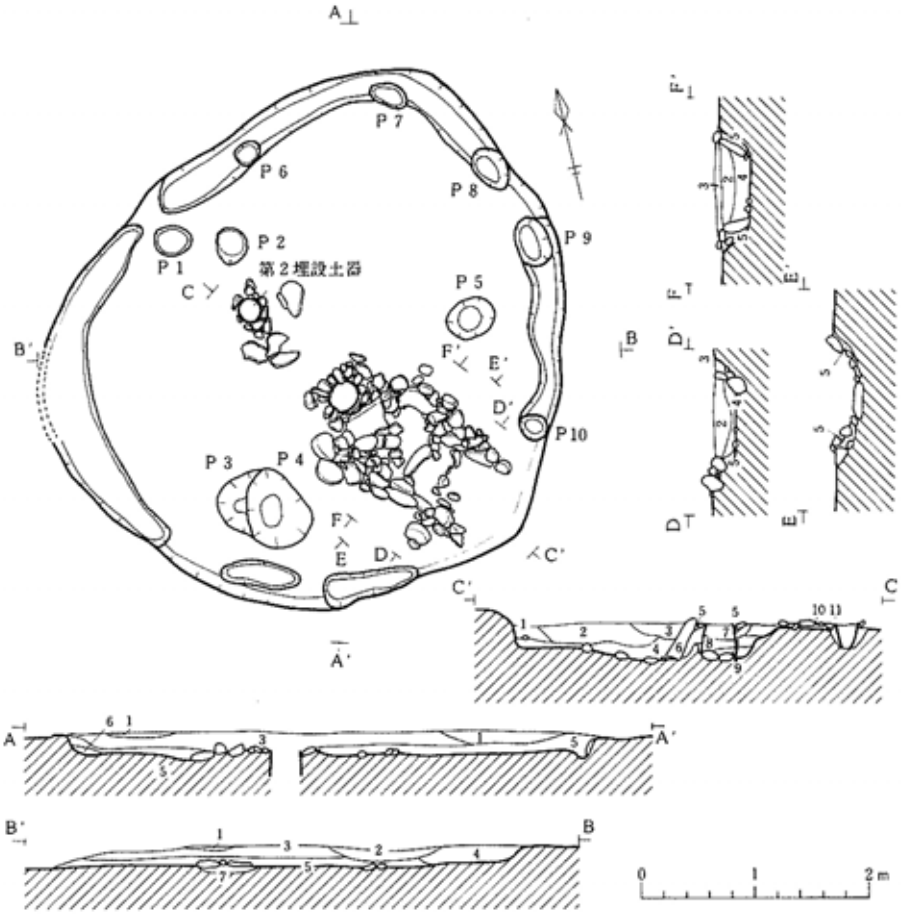
深鉢

a．口縁部が外反するもの(第5図、第6図1、第7図3･4、7～15)

第5図は口縁部が欠損しているが、口縁部が外反し、胴央部でゆるやかに膨らみ胴下部にむかってすぼむ器形と考えられる。胴上部には隆線による玉抱き連結「S」字状文様が描かれ、その外側と玉の内部に撚糸文Rℓが充填されている。第6図1は胴上部でやや膨らみ胴下部にむかって直線的にすぼむ器形と考えられる。胴上部には各部分で連結した「∫」字状の無文帯と、その外側に充損された長惰円形の縄文帯が沈線によって区画され、それらの文様が横方向に連続する。胴部下端にも沈線が巡る。第7図3は外反し、胴央部でゆるやかに膨らみ胴下部に向かってすぼむもの、4は直線的にすぼむものである。第7図7～14は胴部資料で文様表現技法をみると、7･10～14は隆線で、8～9は沈線で無文帯と地文帯を区画している。15は櫛歯状条線文が施されている。

b.口縁部が直立するもの(第7図1･2･5･6)

いずれも胴部にむかって直線的にすぼむもので第7図1･5は頸部に横位の沈線が巡り、地



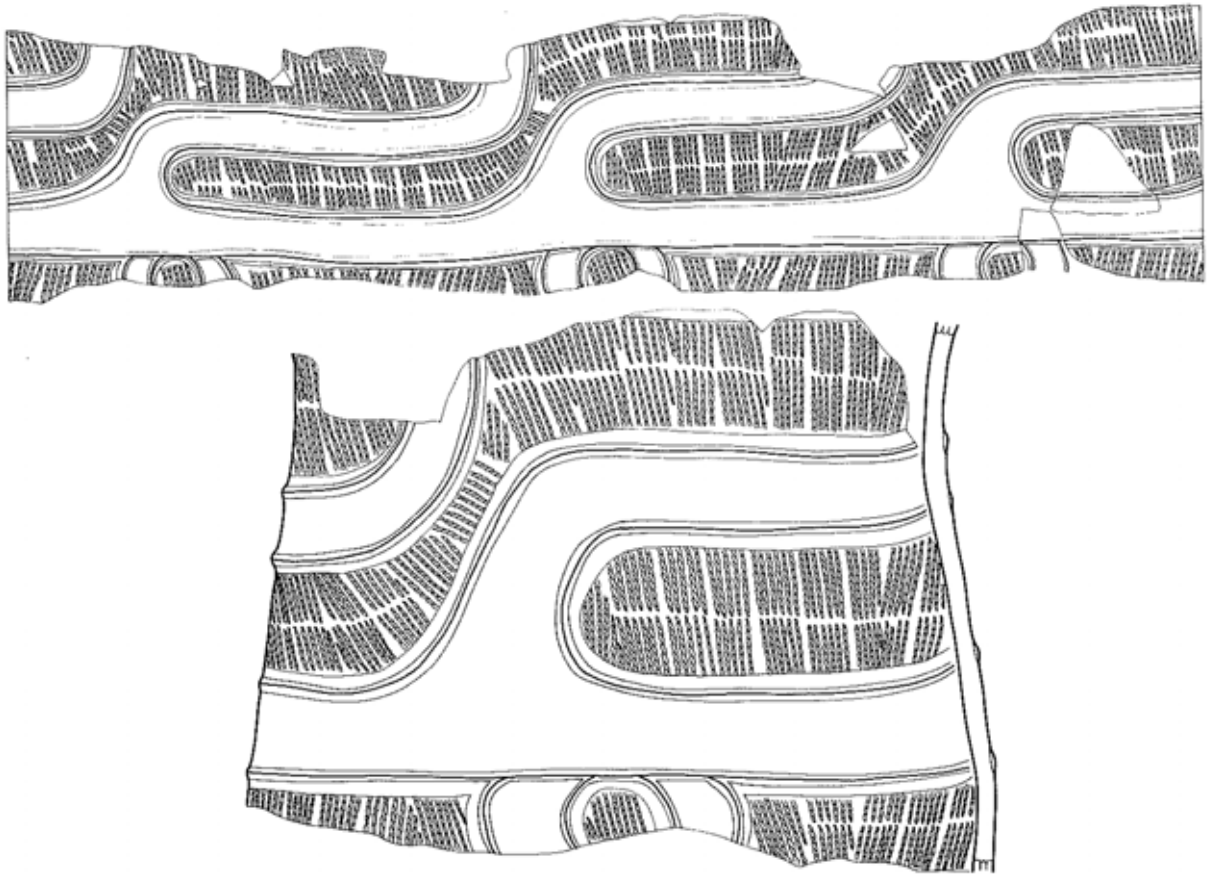
A－A'
B－B'

番号	土　色	土　性	備　考
1	黒褐色　7.5YR2/2	砂質シルト	酸化鉄を多く含む
2	黒　色　5YR1.7/1	砂質シルト	砂礫が混る
3	黒　色　7.5YR2/1	砂質シルト	砂礫が混る。粘性有
4	黒褐色　7.5YR2/2	砂質シルト	砂礫の混入が多い
5	黒　色　5YR1.7/1	砂質シルト	
6	黒褐色　10YR3/2	砂質シルト	周溝の埋土
7	黒　色　7.5YR2/1	砂質シルト	粘性有

C－C'　F－F'
D－D'
E－E'

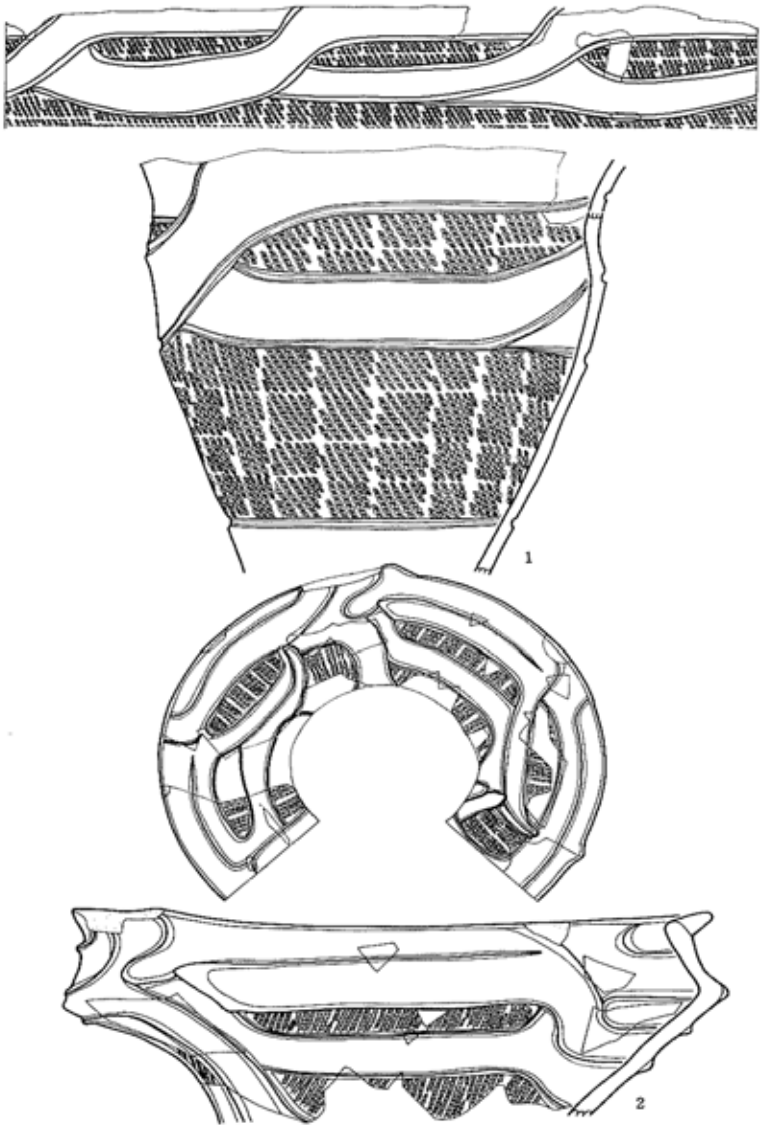
番号	土　色	土　性	備　考
1	暗褐色　10YR1.7/1	砂質シルト	炭化物を含む
2	暗褐色　10YR3/3	砂質シルト	
3	黒　色　10YR1.7/1	砂質シルト	粘性有
4	黒　色　10YR2/1	砂質シルト	炭化物小量含む
5	黒　色　7.5YR2/1	砂質シルト	
6	黒褐色　7.5YR2/2	砂質シルト	小礫を含む
7	暗褐色　10YR3/3	砂質シルト	
8	褐　色　10YR4/4	砂質シルト	
9	褐　色　10YR4/6	砂質シルト	
10	暗褐色　7.5YR3/4	砂質シルト	
11	暗褐色　7.5YR3/4	砂質シルト	

第４図　第１号住居跡



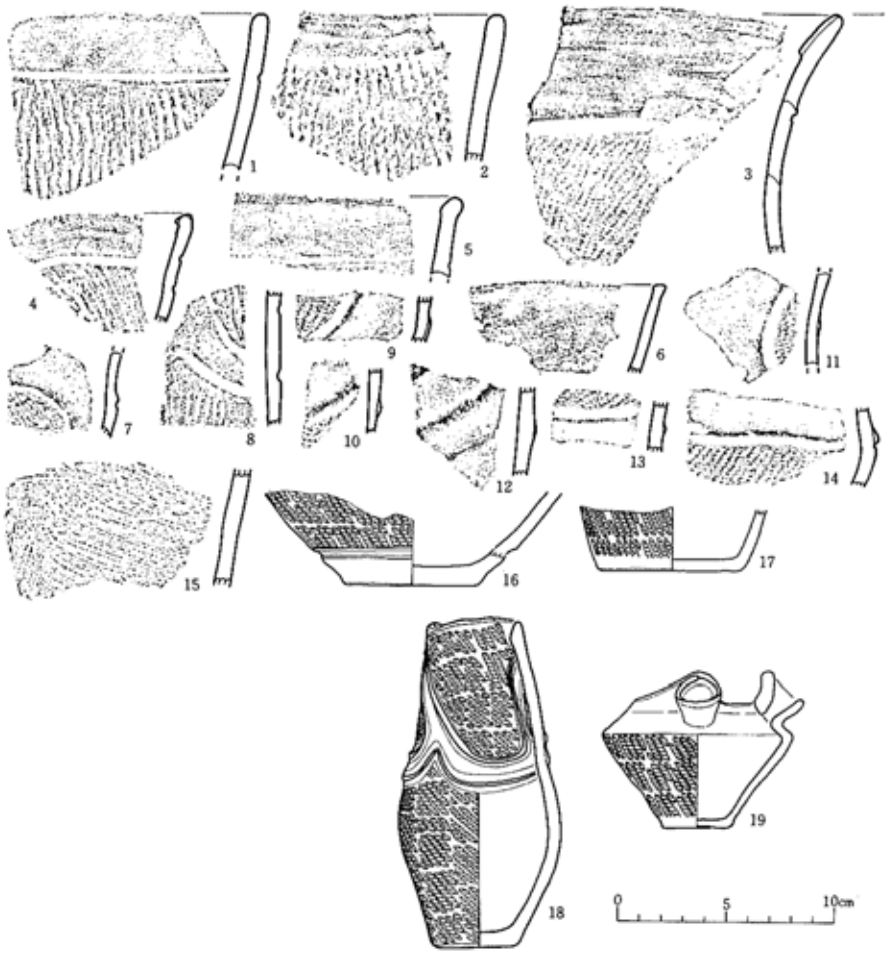
番号	地区・層位	器形	分類	特	徴	図版
1	炉	埋	設	深鉢	A1	口縁部：玉抱き「S」字状文 撚糸Rl 充填	6-1

第5図　第1号住居跡出土土器(1)



番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	第2埋設	深鉢	A1	「∫」字状文 縄文 LRL 充填	6-2	2	床　面	浅鉢		区画隆線文　撚糸文Lr	13-1

第6図　第1号住居跡出土土器(2)



番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	埋　土	深鉢	B	口縁部：頸部沈線　Lr 燃糸文	13-3	11	埋土２層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L R 縄文充填	13-9
2	埋土３層	深鉢	B	口縁部：Lr 燃糸文	13-4	12	埋土３層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文	13-11
3	埋土３層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：頸部沈線　R L R 縄文	13-5	13	埋土３層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L 縄文充填	13-14
4	埋土２層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：頸部沈線	13-7	14	埋土３層	浅鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L 縄文充填	13-16
5	埋土２層	深鉢	B	口縁部：頸部沈線	13-6	15	埋土	深鉢	A Ⅰ	胴部：爪痕状条線文	13-22
6	埋土２層	深鉢	B	口縁部	13-8	16	埋土	浅鉢		底部：胴下端に沈線　L R 縄文	
7	埋　土	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L R 縄文充填	13-15	17	埋土	深鉢		底部：L R 縄文	
8	埋土３層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　R L R 縄文充填	13-12	18	埋土３層	植物土器		口縁部：区画隆線文 L R 縄文充填	13-2
9	埋土３層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　R L 縄文充填	13-10	19	埋土３層	植物土器		口縁部：口縁上部に注口　L R 縄文	8-6
10	埋土２層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L 縄文充填	13-13						

第７図　第１号住居跡出土土器(3)

文帯と区画されている。2は地文だけ、6は無文帯のみで文様構成は、はっきりとはわからない。

浅鉢(第6図2)

口縁部が内傾するもので、隆線によって「∫」字状の無文帯と、その外側に文填された長惰円形の縄文帯に区画されている。縄文帯には撚糸文Lrが充填されている。

注口土器(第7図19)

浅鉢形の注口土器である。口縁部は内傾し、突起と一体となった上向きの短い注口が付く。胴部にはＬＲ縄文が施されている。

袖珍土器(第7図18)

口縁部は内弯気味に直立し、胴下部でゆるやかに膨らむもので、胴上部に隆線によって文様が描かれ、その内部、外部にＬＲ縄文が施されている。

第２号住居跡

第2号住居跡調査時に床面から新たな住居跡が検出された。調査の結果、第2号住居跡は、新旧2度の使用時期があり、最初に確認した規模の大きい住居跡は旧住居を拡張して構築されたものであった。ここでは最初に確認した住居跡を第2ａ号住居跡、その床面下から検出された住居跡を第2ｂ号住居跡とする。

1.第2a号住居跡

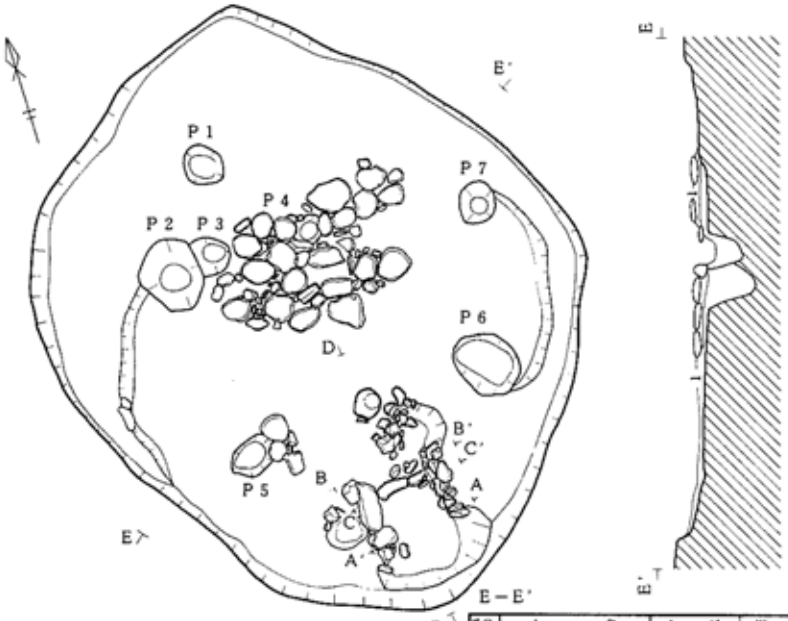
〔平面形・方向〕　調査区のＢＥ-ＢＦ14グリッドに位置する。平面形はほぼ隅丸方形を呈する。径は長軸約5.1m、短軸約4.4mである。複式炉の主軸はNW-ＳＥ方向である。

〔壁の状況〕　地山である砂礫層を壁としている。壁高は最も高く残存している南側で約21㎝である。

〔床面〕　拡張した壁側は地山を床面としている。住居跡中央部付近には平坦な河原石を敷き、床面としている。

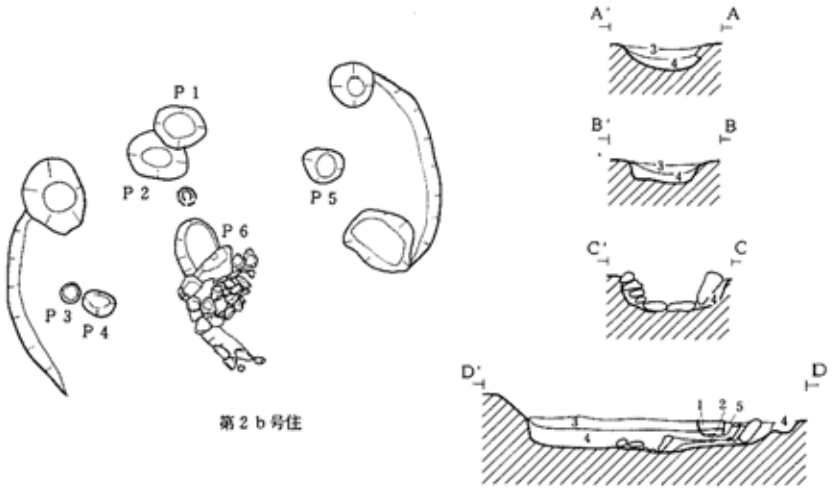
〔柱穴〕　床面から7個のピットが検出された。この中でピット4は炉の長軸の延長線上にあり、炉と対称の位置にピット5・6があることから主柱穴と考えられる。他は補助的な柱穴かもしれない。

〔炉〕　炉の主軸はNW－ＳＥ方向である。平面形は「コ」字状を呈すものと考えられる。形態は土器埋設部、敷石石組部、石組部からなる。土器埋設部は石囲いされていたものと考えられるが、数個の石が残存しているだけで、詳細は明らかでない。また敷石石組部、石組部の石が失われているため使用時の状態は不明である。石組部の西壁は河原石を二～三段に組んで構築されている。



第２ａ号住

番号	土　　色	土　性	備　考
1	黒褐色 7.5YR2/2	砂質シルト	小礫を含む



第２ｂ号住

A－A'　C－C'
B－B'　D－D'

番号	土　　色	土　性	備　　考
1	黒　色 7.5YR2/1	砂質シルト	炭化物、小礫を含む
2	黒　色 7.5YR2/1	砂質シルト	１層に比べサラサラしている
3	黒　色7.5YR2/1	砂質シルト	小礫を含む
4	黒　色 7.5YR2/1	砂質シルト	炭化物を含む
5	赤褐色 5YR4/6	砂質シルト	

第８図　第２号住居跡

2.第2b号住居跡

〔平面形・方向〕　調査区のＢＥ－ＢＦ14グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈すものと考えられる。

〔壁の状況〕　砂礫層を壁としている。壁高は約10㎝でゆるやかに立ち上がる。

〔床面〕　地山を掘り込んだ底面をそのまま床面としている。

〔柱穴〕　床面から6個のピットが検出された。これらの中で柱穴と考えられるのは、炉の長軸の延長線上にあるピット2、炉の左右に位置するピット4・5である。

〔炉跡〕　ピット6が土器埋設部、第2a号住の土器埋設部の西側が敷石石組部、第2a号住の敷石石組部と石組部を通ずるところまで第2b号住の石組部と推定される。ほとんど崩壊しているが、敷石石組部の奥壁と、壁の一部が残存している。また炉の長軸の延長線上に土器が2個重なって埋設されていた。

〔出土土器〕

深鉢

ａ．口縁部が外反するもの(第9図3・6、第10図9～11、14～18,20～22)

いずれも胴部にむかって直線的にすぼむもので、3は隆線によって縄文帯と無文帯とに区画され、縄文帯は撚糸文Lrを充填後、円形の刺突を加えている。6は隆線によって「S」字状と思われる無文帯と、その外側の縦位刻目が連続して施されている部分に区画されている。

第10図9～11、14～22は胴部資料で、いずれも外反する器形と推測される。文様の施文方法をみると9・10、16・17は沈線で、11・15・20～22は隆線で、14は隆沈線で無文帯と縄文帯を区画している。

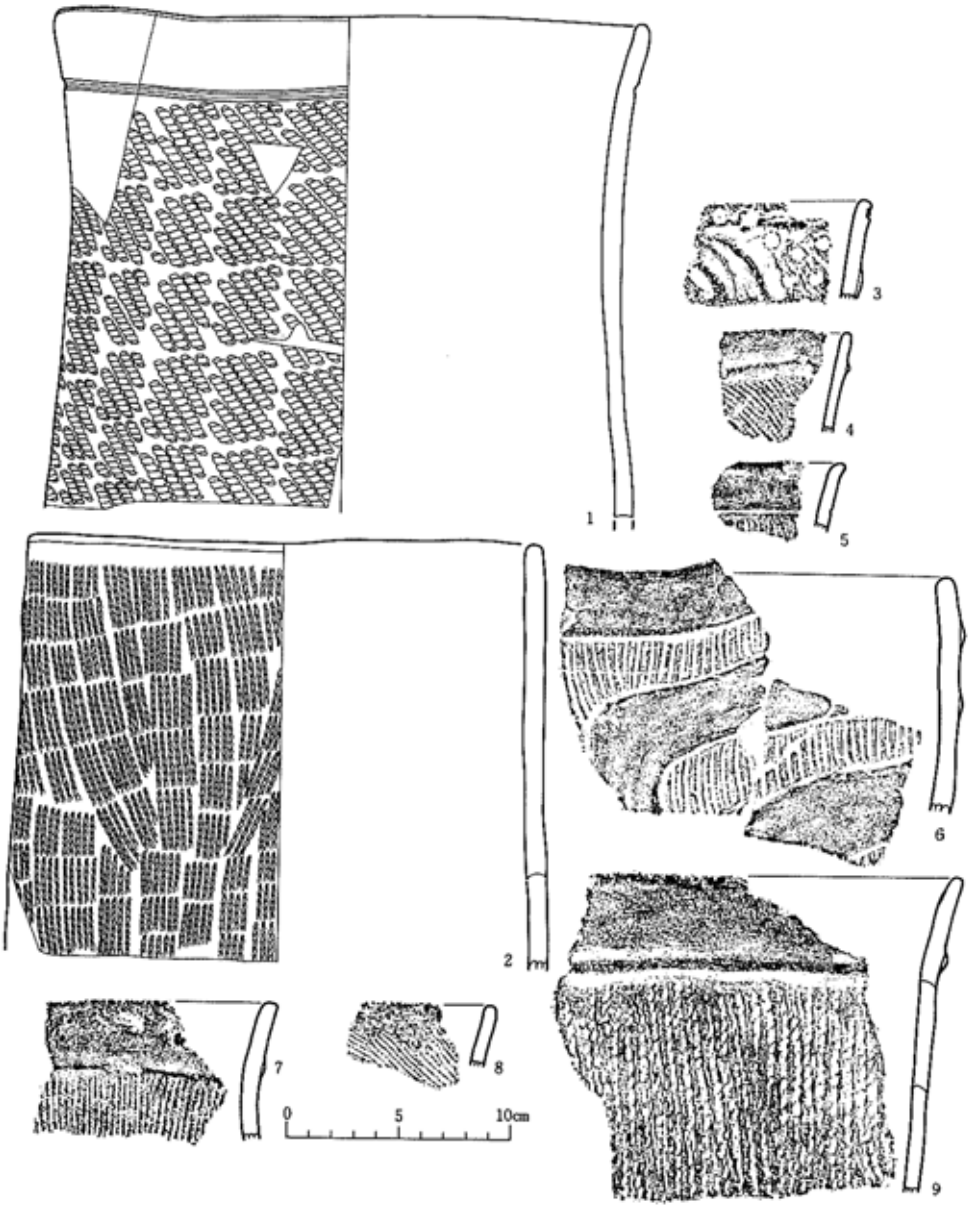
b.口縁部が直立するもの(第9図1・2、4・5、7～9、第10図1～8)

第9図1・2、4・5、7～9、第10図1～8は口縁部資料で、いずれも地文のものである。第9図1・5・7は頸部に横位の沈線を巡らし縄文帯と区画している。2・6、第10図1～8は頸部に区画線を巡らさず地文のみで構成されている。

〈その他の土器〉

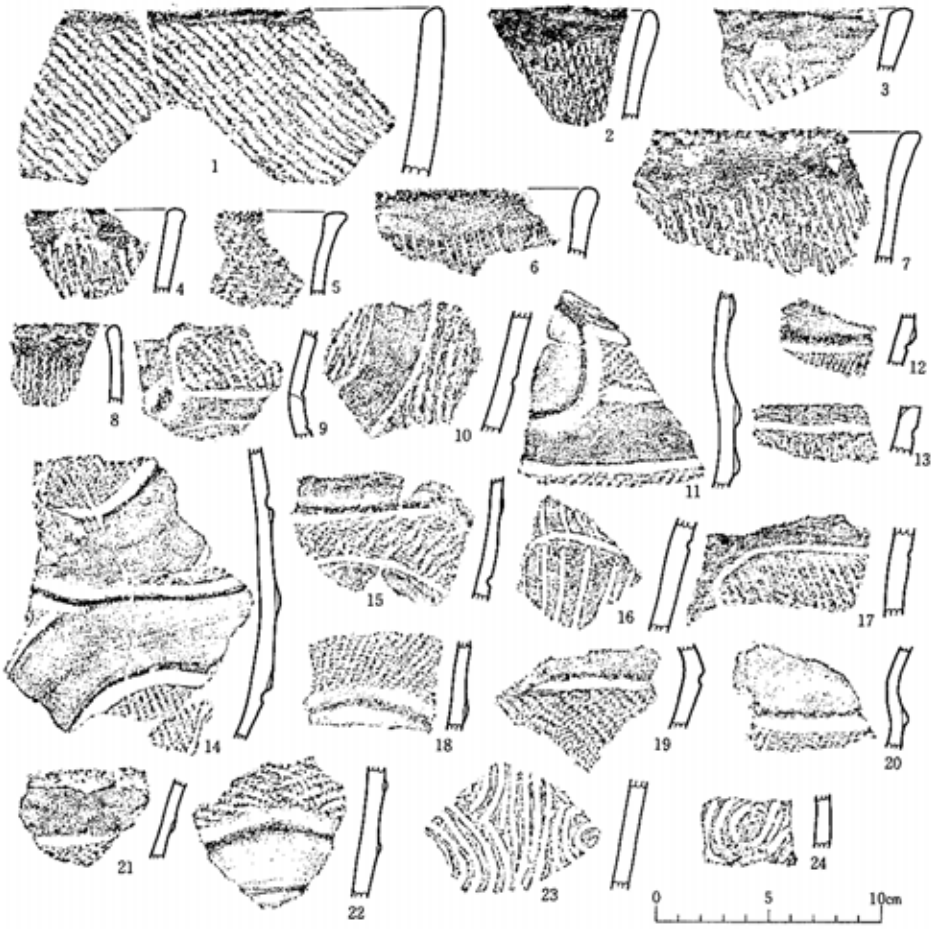
第10図12・13はそれぞれ隆沈線、沈線によって縄文帯と無文帯を区画しているが小破片のため器形の判別は難しい。

第10図23、24は多条沈線文が施されている。第11図の1・2は敷石下から重なって出土したもので、1は地文のみで底部から胴部にむかって直線的に外傾し、2は底部から胴部にむけて外傾して立ち上がり沈線によって楕円区画文が施されている。3は袖珍土器で、口縁部が内弩気味に直立し、胴下部にむかって直線的にすぼむ器形で、口縁部から胴部下端に縦位あるいは楕円形状の文様が沈線によって描かれている。



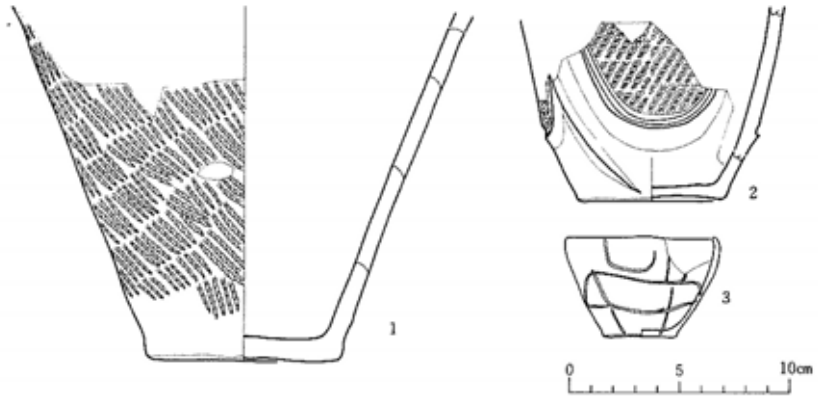
番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	埋土２層	深鉢	B	口縁部：頸部に沈線　ＬＲ縄文	7-2	6	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	口縁部：「S」字状文様、縦位刻目	15-40
2	ｴﾟ 埋 設	深鉢	B	口縁部：Lr 燃糸文	7-1	7	埋土２層	深鉢	B	口縁部：頸部に隆線、Rr 燃糸文	13-17
3	埋土	深鉢	ＡⅠ	口縁部：円形刺突文　Rr 燃糸文	13-23	8	埋土１層	深鉢	B	口縁部：ＬＲ縄文	13-24
4	埋土２層	深鉢	B	口縁部：頸部に隆線　ＬＲ縄文	13-18	9	埋土２層	深鉢	B	口縁部：頸部に隆線、Lr 燃糸文	14-1
5	埋土１層	深鉢	B	口縁部：頸部に沈線　Rr 燃糸文	13-19						

第９図　第２号住居跡出土土器(1)



番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	埋土２層	深鉢	B	口縁部：ＬＲ縄文	13-20	13	埋土１層	深鉢		胴部：区画沈線文　Rℓ巻糸文	14-3
2	埋土２層	深鉢	B	口縁部：Ｌｒ巻糸文	13-21	14	埋土２層	深鉢	ＡⅠ	胴部：「Ｓ」字状区画文 ＬＲ縄文充填	14-8
3	埋土２層	深鉢	B	口縁部：ＬＲ縄文	13-26	15	埋土２層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画隆沈線文　ＬＲ縄文充填	14-11
4	埋土１層	深鉢	B	口縁部：Ｌｒ巻糸文	13-27	16	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画沈線文	14-10
5	埋土２層	深鉢	B	口縁部：ＲＬＲ縄文	13-28	17	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画沈線文　Rℓ巻糸充填	14-9
6	埋土２層	深鉢	B	口縁部：条線文	13-25	18	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画隆線文　Ｌｒ縄文充填	14-12
7	埋土２層	深鉢	B	口縁部：Ｌｒ巻糸文	14-2	19	埋土１層	深鉢		胴部：区画沈線文　ＬＲ縄文充填	14-17
8	埋土１層	深鉢	B	口縁部：Ｌｒ巻糸文	13-29	20	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画隆線文　ＲＬ縄文	14-18
9	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画沈線文　ＬＲ縄文充填	14-7	21	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画隆線文　ＬＲ縄文充填	14-13
10	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画沈線文　Rℓ巻糸文充填	14-6	22	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画隆線文　ＬＲ縄文充填	14-14
11	埋土２層	深鉢	ＡⅠ	胴部：区画隆線文　ＲＬＲ縄文充填	14-4	23	埋土２層	深鉢		胴部：多条沈線文	14-16
12	埋土２層	深鉢		胴部：区画隆沈線文　Rℓ巻糸文充填	14-5	24	埋土１層	深鉢		胴部：多条沈線文	14-15

第10図　第２号住居跡出土土器(2)



番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	敷石下	深鉢		胴部:Lr燃糸文　2b号住	8-1	3	埋　土				8-4
2	敷石下	深鉢		胴部:区画隆線文,RLR縄文2b号住							

第11図　第２号住居跡出土土器(3)

第３号住居跡

〔重複、増改築〕　北部で攪乱をうけている部分がある。南部(複式炉の西側)は浅い土壙と切り合っているが、この土壙は複式炉の掘り方に切られていることから住居は土壙よりも新しいと考えられる。

〔平面形･方向〕　調査区のＡＳ－ＡＴ14～15グリッドに位置する。壁が明確に検出できない部分が多く、不正確ではあるが、北側、西側の壁の残存状態から円形に近いものと推定される。複式炉及び第2理設土器の主軸はＮ－Ｓ方向である。

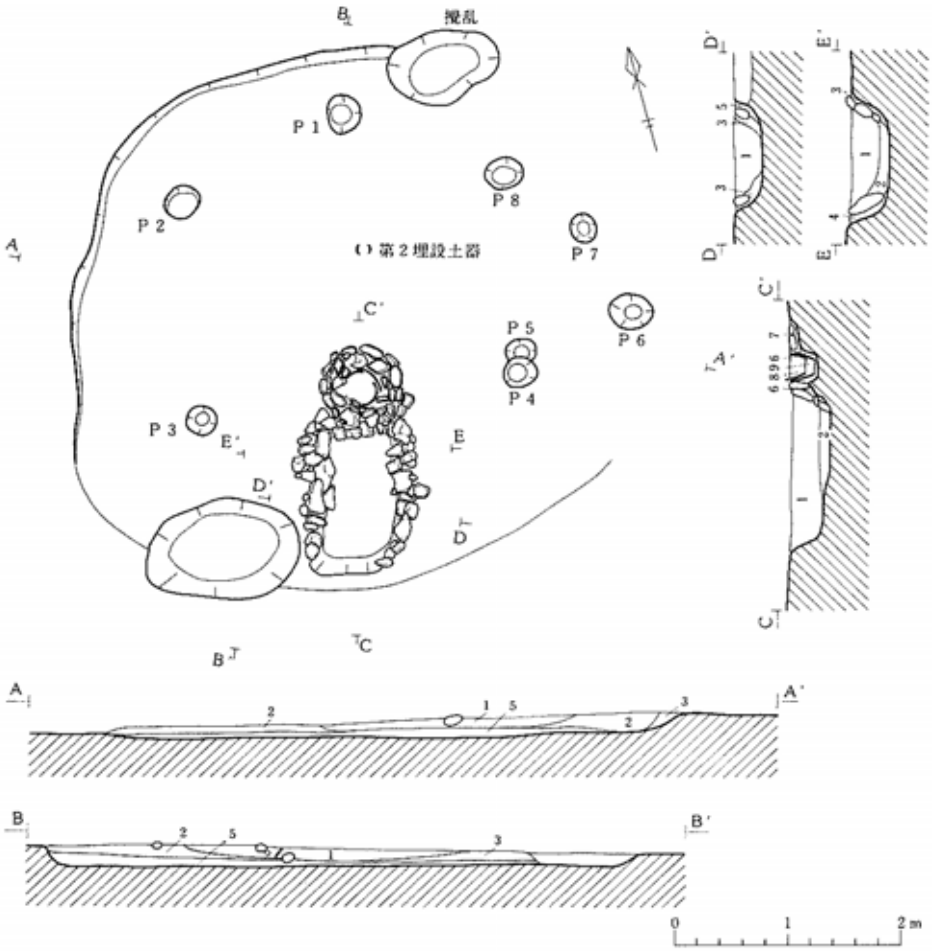
〔壁の状況〕　北～西側コーナーで比較的良好に遺存している。床面から遺構確認面までの高さは、高い部分で約18㎝で、床面からやや急に立ち上がる。

〔床面〕　地山を床面としている。

〔柱穴〕　ピットは全部で8個検出された。いずれも暗褐色、黒褐色のシルトで小礫を含んでいる。このうちピット1は炉の長軸の延長線上にあり、ピット3･4は炉をはさんでほぼ対称の位置にある。ピット2･8もほぼ炉の主軸と対称の位置にあり、深さがいずれも30～40㎝と一定していることから主柱穴の可能性が強い。

〔周溝〕　検出されなかった。

〔炉跡〕　炉の主軸はN-Ｓ方向である。土器埋設石囲部が住居の中心よりもやや南側に位置し、石組部は住居の壁付近までのびている。形態はいずれも底部を欠く深鉢を重ねて倒立させた状態で埋設した土器埋設石囲部、敷石石組部、石組部の3つの部分からなる土器埋設石組複式炉



A－A'
B－B'

C－C'
D－D'
E－E'

番号	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色 7.5Y R3/1	シルト質ローム	粘性有
2	暗褐色 7.5Y R3/4	シルト質ローム	炭化物を少量含む
3	褐　色 7.5Y R3/3	シルト質ローム	地山粒を含む
4	暗褐色 7.5Y R3/4	シルト質ローム	地山粒を含む
5	黒褐色 10Y R2/2	砂質シルト	

番号	土　　色	土　性	備　　考
1	極暗褐色 7.5Y R2/3	砂質シルト	粘性有
2	黒褐色 10Y R2/2	砂質シルト	小礫を含む
3	極暗褐色 7.5Y R2/3	砂質シルト	粘性有、しまりある
4	黒褐色 7.5Y R2/2		粘性有
5	黒褐色 7.5Y R3/1	砂質シルト	礫を含む
6	褐　色 7.5Y R4/4	砂質シルト	地山粒を含む
7	暗褐色 7.5Y R3/3		砂粒を含む
8	暗褐色 7.5Y R3/4		炭化物を含む
9	暗褐色 7.5Y R3/4		８より炭化物多く含む

第12図　第３号住居跡

で、平面形は「コ」字状を呈している。構築法は、掘り方を掘り(土器埋設石囲部と石組部の前後関係は不明)、土器を埋め、次に敷石石組部の奥壁と側壁の石を下から上へ二〜三段に積み上げ、次に石組部の順に構築している。奥壁の石は火熱をうけ、もろくなっている。

〔出土遺物〕

深鉢

a.口縁部が外販および外傾するもの

(1)口縁部が外傾するもの(第13図1)

胴部にむかって直線的にすぼむもので、胴上部文様は幅の広い「∫」字状無文帯とその外側に充損された長楕円形の縄文帯に区画され、横方向に連続する文様となる。胴部下端にも横位の隆沈線が巡り、胴部下端から底部までは無文帯となる。

(2)口縁部が外反するもの(第13図2〜7、第14図4〜8、第15図1〜12・15)

このうち第13図2〜7、第14図4〜8は口縁部資料で、第15図1〜12・15は胴部資料である。第13図2〜7はいずれも文様をもつもので2・5・6は隆線によって縄文帯と無文帯とを区画し、3は沈線によって弧状に区画された内部に撚糸文Lrが充填されている。4は口縁部から頸部に弧状の連続した沈線が施される。6は波状口縁を呈している。7は口縁上部が欠損しているが外反し、胴上部でやや膨らむものと考えられる。胴上部には各部分で連続した「∫」字状の無文帯とその外側に充填された長楕円形の縄文帯が隆沈線によって区画され、それらの文様が横方向に連続する。第14図4は地文のもので頸部に横位の沈線を巡らし、縄文帯と無文帯を区画している。5〜8は小破片のために文様構成は明確ではないが、5〜7は横位の沈線が、8は横位の隆線が巡り、縄文帯と無文帯とを区画している。

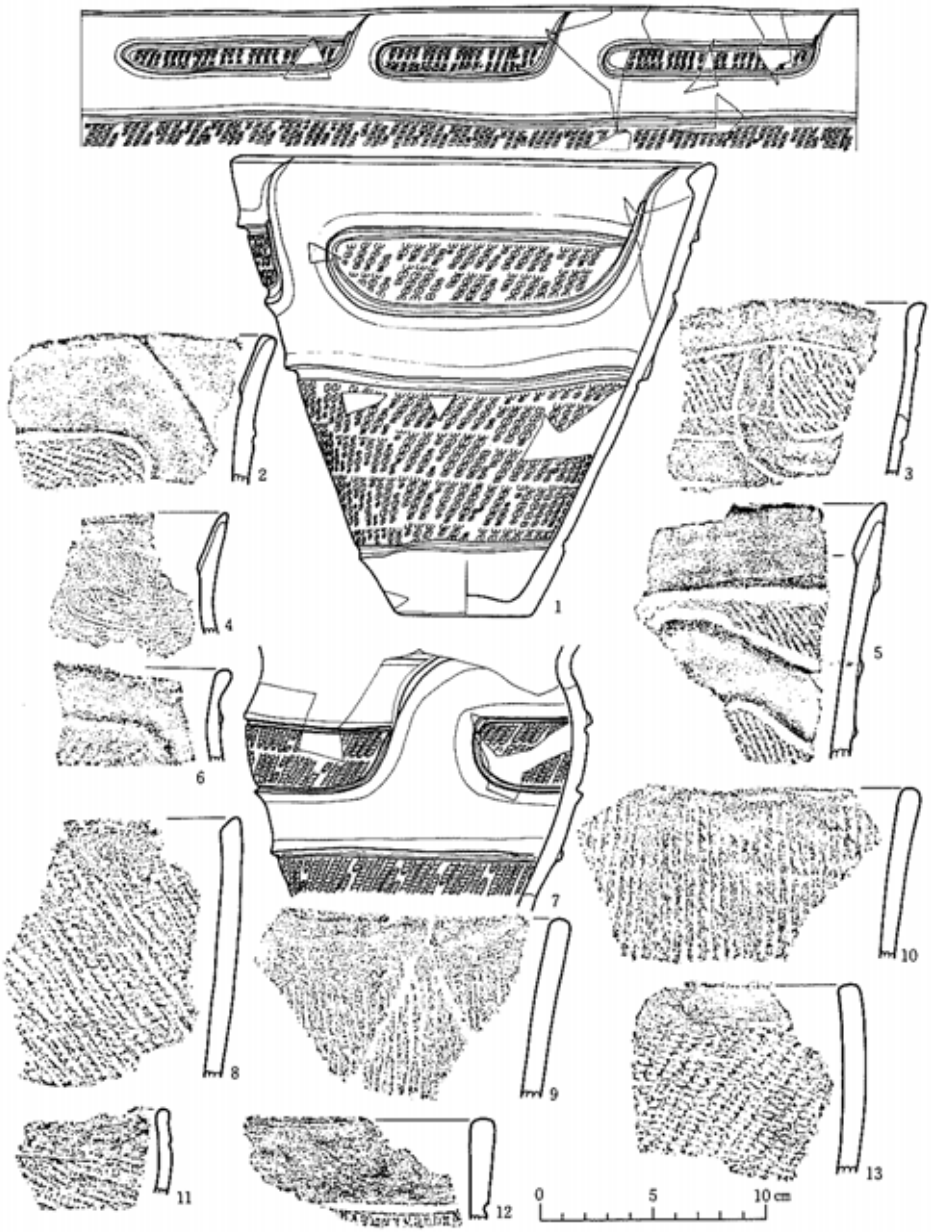
胴部資料の文様表現技法をみると第15図1〜3、5〜9、12は隆線で、4、10〜11は沈線でそれぞれ縄文帯と無文帯を区画している。15は横位の隆線の下方に円状の刺突がなされている。

b.口縁部が直立するもの(第13図8〜13、第14図1〜3・9〜11・13)

第13図8〜13、第14図1〜3・9〜11は口縁部資料である。第13図11・13は口縁部が内湾気味に直立するが、その他はいずれも胴部にむかって直線的にすぼむものである。第14図10〜11は地文のもので頸部に横位の隆線を巡らし地文帯とを区画している。第13図8〜11は地文のものであるが頸部に横位の区画線は巡らさない。第13図11・12、第14図2・3は小破片のため文様構成は明らかではないが、いずれも横位の沈線が巡らされ縄文帯と無文帯とを区画している。11は波状口縁と考えられる。

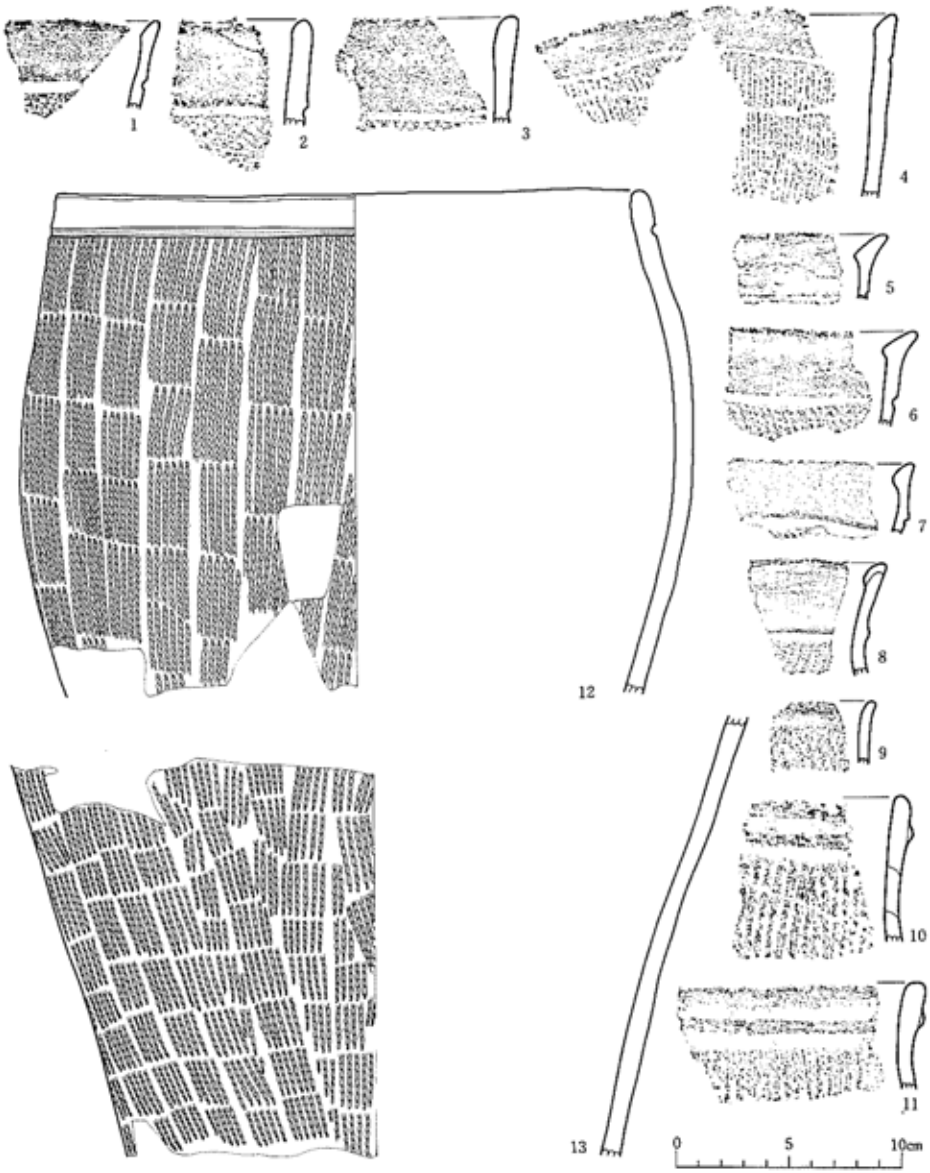
c.口縁部が内湾するもの(第14図12)

内弯し、胴上部で膨らみ下部ですぼむ器形と考えられる。頸部に横位の沈線を巡らし、縄文帯と無文帯とを区画している。



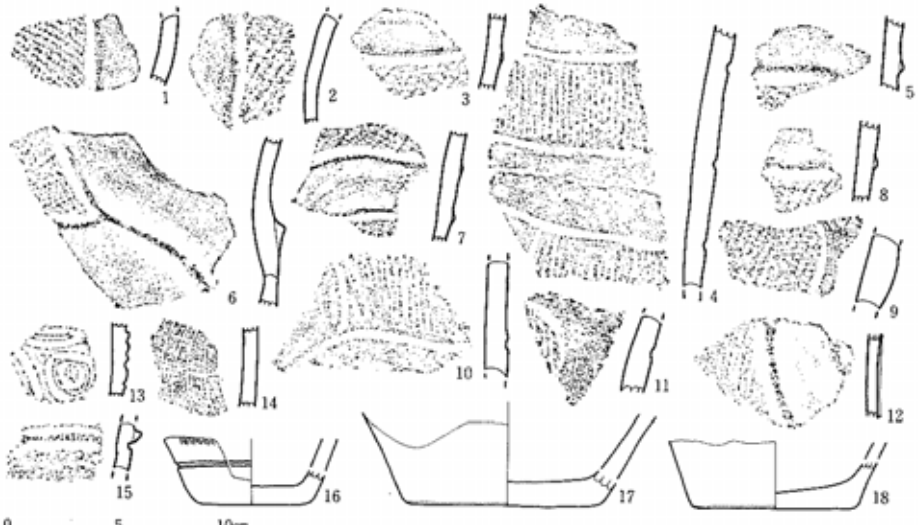
番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	床　面	深鉢	A Ⅱ	「∫」字状文、ＲＬＲ縄文充填	8-3	8	埋土１層	深鉢	B	口縁部：ＬＲ縄文	14-35
2	埋土１層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：区画隆沈線文　ＬＲ縄文充填	14-29	9	床　面	深鉢	B	口縁部：Rl 撚糸文	14-33
3	埋土１層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：沈線による渦状区画文 Lr 撚糸充填	14-30	10	埋土１層	深鉢	B	口縁部：Rl 撚糸文	14-34
4	埋土１層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：多条沈線	14-31	11	埋土１層	深鉢	B	波状口縁　ＬＲ縄文	14-40
5	埋土１層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：「S」字状区画文　ＬＲ縄文充填	14-32	12	埋土１層	深鉢	B	口縁部：頸部に沈線　Rl 撚糸文	14-37
6	埋土１層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：区画隆線文　縄文不明	14-36	13	床　面	深鉢	B	口縁部：ＲＬ縄文	14-39
7	埋土１層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：「∫」状区画文　ＲＬ縄文充填	8-2						

第13図　第３号住居跡出土土器(1)



番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	埋土２層	深鉢	B	口縁部：頸部に沈線　ＲＬ縄文	14-19	8	床　　面	深鉢	ＡⅠ	口縁部：頸部に隆線　ＲＬ縄文	14-25
2	埋土１層	深鉢	B	口縁部：頸部に沈線　ＲＬ縄文	14-26	9	埋土１層	深鉢	B	口縁部：Rl 撚糸文	
3	床　　面	深鉢	B	口縁部：頸部に沈線　撚糸文	14-20	10	埋土１層	深鉢	B	口縁部：頸部に隆線　Rl 撚糸文	14-28
4	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	口縁部：頸部に沈線　Rl 撚糸文	14-27	11	埋土１層	深鉢	B	口縁部：頸部に隆線　Rl 撚糸文	14-24
5	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	口縁部：頸部に沈線	14-21	12	炉内埋設	深鉢	C	口縁部：頸部に沈線　Rl 撚糸文	9-1
6	埋土１層	深鉢	ＡⅠ	口縁部：頸部に沈線　ＲＬ縄文	14-22	13	炉内埋設	深鉢	B	胴部：Ｌｒ撚糸文	9-2
7	埋土２層	深鉢	ＡⅠ	口縁部：頸部に沈線　ＬＲ縄文	14-23						

第14図　第３号住居跡出土土器(2)



番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L 縄文	14-45	10	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　Rℓ 撚糸文	15-5
2	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L R 縄文	14-44	11	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　Rℓ 撚糸文	
3	床　面	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L R 縄文	14-41	12	埋土2層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L 縄文	15-4
4	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　Rℓ 撚糸充填	14-48	13	埋土1層	深鉢		胴部	15-3
5	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文	14-42	14	埋土1層	深鉢		胴部：平行沈線文	15-2
6	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文	14-38	15	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：横位隆線文、円状刺突	15-1
7	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L R 縄文	14-47	16	埋土2層	深鉢		底部：沈線　L R 縄文	
8	埋土2層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L 縄文	14-43	17	埋土1層	深鉢		底部	
9	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　R L 縄文	14-46	18	埋土2層	深鉢		底部	

第15図　第３号住居跡出土土器(3)

〈その他の資料〉(第15図13･14･16～18)

13は弧状の沈線が、14は弧状と考えられる条線文が施されているが、いずれも小破片のため文様構成は明確でない。16～18は底部資料で、16は胴部下端に横位の沈線を巡らしその上部にＬＲ縄文が認められる。

第４号住居跡

住居の南側約半分が調査対象区外であったため、全体の範囲は明確ではない。住居に伴う複式炉も確認したが、調査対象区外まで延びるため埋設土器だけを取り上げた。

〔重複･増改築〕　西側コーナーで攪乱をうけている部分がある。

〔平面形･方向〕　調査区のＢＥ－ＢＦ17グリットに位置する。平面形は明確ではないが確認された複式炉は本住居に伴う施設である。複式炉及びその長軸の延長線上にある埋設土器の主軸はＮＥ-ＳＷ方向である。

〔壁の状況〕　西側でゆるやかに立ち上がる部分が検出されたがその他は確認できなかった。
〔床面〕　炉の長軸の延長線上に平担な河原石を敷き床面としている部分があるが北～西側では礫層が覆っていた。
〔柱穴〕　ピットは全部で12個検出された。主柱穴にあたるものは住居の範囲が明らかではないので明確ではないが、炉及び埋設土器の長軸の延長線にあるピット10はその可能性がある。
〔周溝〕　検出されなかった。
〔炉跡〕　炉の主軸はＮＥ－ＳＷ方向である。土器埋設石組複式炉と考えられるが、未調査部分があるため詳細は確認できていない。
〔出土土器〕

a.口縁部が外傾および外反するもの

(1)口縁部が外反するもの(第17図1～3･6･7･12～22)

第17図1・2は外反し、胴部にむかって直線的にすぼむものである。1は文様をもつもので隆線によって文様が描かれ、縄文帯と無文帯を区画している。6･7も胴部にむかって直線的にすぼむもので波状口縁を呈している。6は弧状と考えられる沈線によって縄文帯と無文帯とに区画されているが文様構成は不明である。7は頸部に横位の沈線を巡らし縄文帯と無文帯とを区画している。3は外反し、胴上部で膨らみ下部ですぼむ器形のものと考えられる。文様をもつもので沈線によって幅の広い無文帯と縄文帯とに区画されている。12～22は胴部資料で12～15･18･20･22はいずれも沈線によって、16･19･21は隆線によって、17は隆沈線によって縄文帯と無文帯を区画している。

(2)口縁部が外傾するもの(第18図)

外傾し、胴部にむかって直線的にすぼむ器形である。頸部に横位の沈線を巡らし、縄文帯と無文帯を区画している。

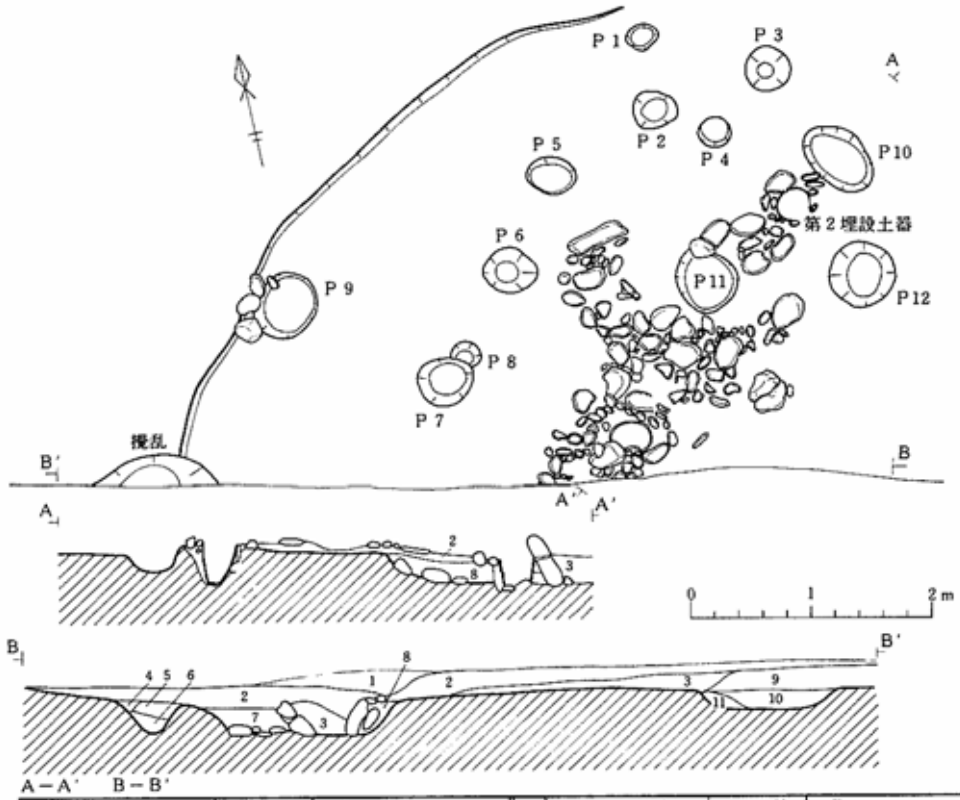
b.口縁部が直立するもの（第17図4・5・8～11・第19図1）

第17図4は文様をもつもので、口縁部が内弯気味に直立し、胴上部でわずかに膨らむ器形である。沈線によって幅の広い無文帯と縄文帯とに区画され、文様は横方向に連続する。5･8･11は内弯気味に直立するもので、5は地文、11は頸部に横位の沈線を巡らし縄文帯と無文帯とを区画している。8も頸部に横位の沈線を巡らしているが小破片のため文様は明確ではない。

第19図1は炉内埋設土器で、口縁部、胴下部は欠損しているが、胴部から直線的に口縁部に至るものと考えられ、地文だけで構成されている。

c.口縁部が外反し、胴上部が強く屈曲するもの(第19図2)

口縁上部が欠損しているが、外反し、胴上部で強く屈曲し、下部ですぼむ器形である。頸部に横位の沈線を巡らし、縄文帯と無文帯を区画している。



番号	土　色	土　性	備　考	番号	土　色	土　性	備　考
1	黒　色 7.5YR2/1	砂質シルト		7	黒褐色 7.5YR2/2	砂質シルト	粘性有
2	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	炭化物を少量含む	8	黒褐色 7.5YR2/2	砂質シルト	粘性有
3	黒褐色 7.5YR2/2	砂質シルト		9	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	小礫がまじる
4	黒褐色 7.5YR2/2	砂質シルト	小礫がまじる	10	黒　色 10YR2/1	砂質シルト	
5	黒褐色 7.5YR3/2	砂質シルト		11	黒褐色 7.5YR2/2	砂質シルト	
6	暗褐色 7.5YR3/3	砂質シルト					

第16図　第４号住居跡

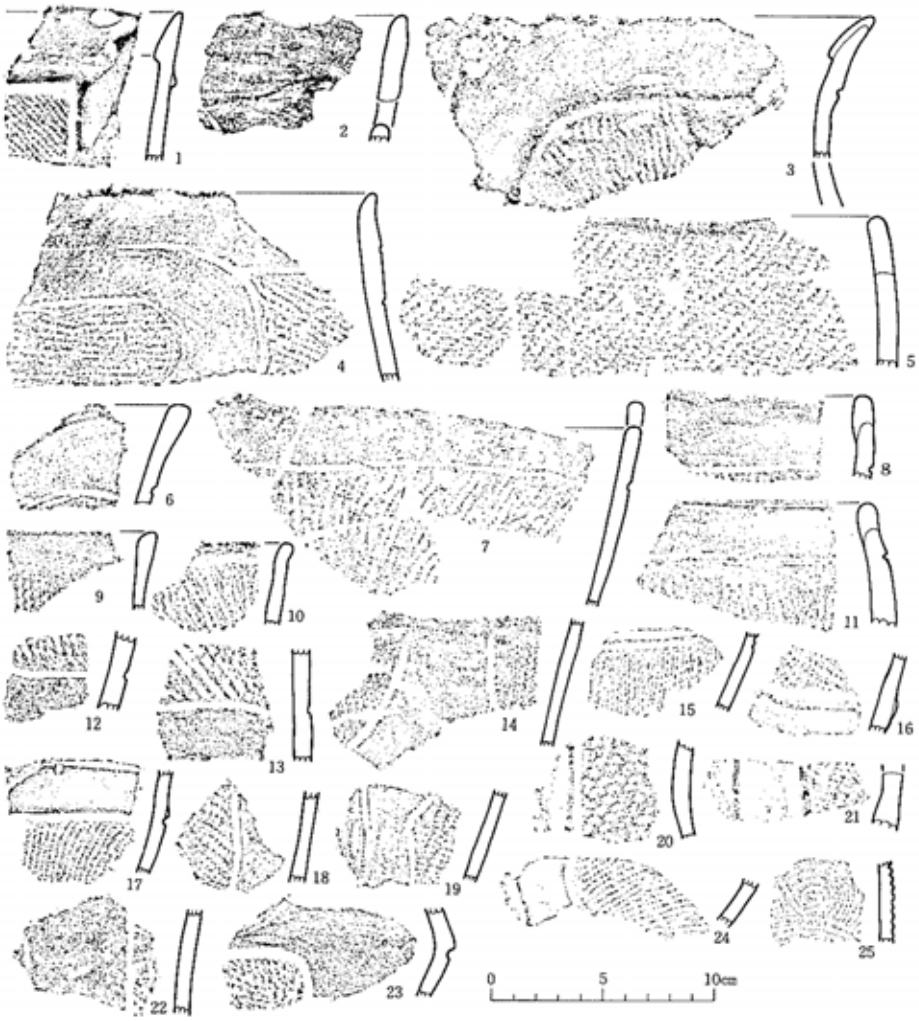
〈その他の資料〉(第17図25、第19図3･4)

25は弧状の多条沈線文が施されているが小破片のため文様構成ははっきりとはしない。第19図3･4は底部資料である。

第５号住居跡

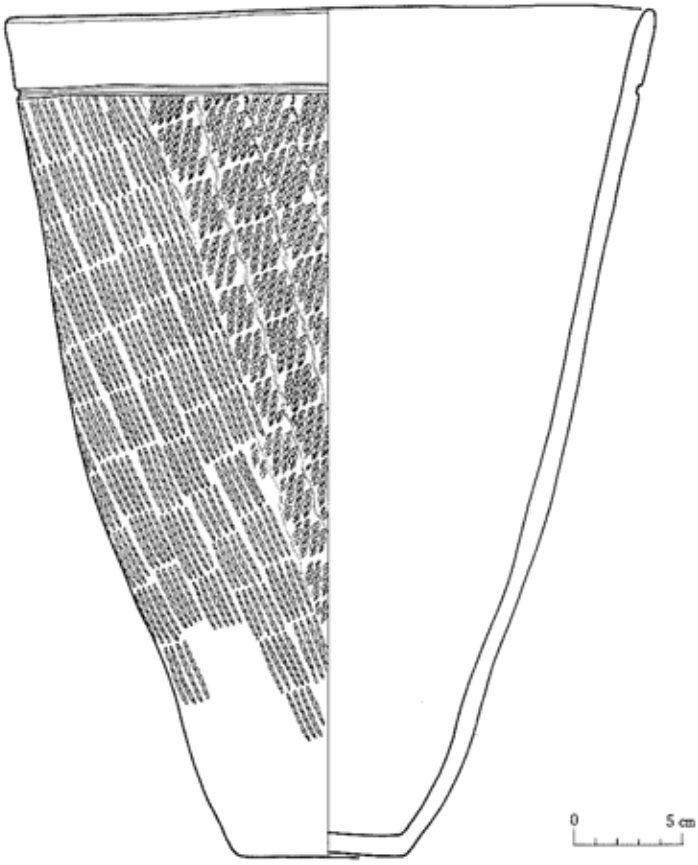
〔重複･増改築〕　東部で攪乱をうけている部分がある。南部では土壙と切り合っているが切り合いは不明である。

〔平面形･方向〕　調査区のＢＥ－ＢＦ15グリッドに位置している。平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。径は長軸が約3.8m、短軸約3mである。複式炉の主軸はNW－ＳＥ方向である。



番号	地区・層位	器形	分類	特徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特徴	図版
1	炉、石組部	深鉢	A Ⅰ	口縁部：区画隆線文　L R縄文充填	15-6	14	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：沈線　L r 撚糸文	15-21
2	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：	15-7	15	埋土	深鉢	A Ⅰ	胴部：沈線　L r 撚糸文	15-16
3	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：区画沈線文　L R縄文充填	15-8	16	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：隆線文　R L縄文	15-18
4	埋土1層	深鉢	B	口縁部：区画沈線文	15-9	17	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆沈線文　R L縄文充填	15-25
5	埋土1層	深鉢	B	口縁部：R L縄文	15-11	18	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　L R縄文	15-22
6	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：区画沈線文	15-15	19	埋土	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　R L縄文	15-17
7	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	口縁部：頸部沈線　R L縄文		20	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　R L R縄文	15-26
8	埋土1層	深鉢	B	口縁部：頸部沈線　R r 撚糸文	15-12	21	埋土	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画隆線文　R L縄文	15-24
9	埋土1層	深鉢	B	口縁部：L r 撚糸文	15-13	22	埋土	深鉢	A Ⅰ	胴部：区画沈線文　縄文	
10	埋土1層	深鉢	B	口縁部：R r 撚糸文	15-14	23	埋土1層	浅鉢		胴部：区画沈縄文　R r 撚糸文	15-23
11	埋土1層	深鉢	B	口縁部：頸部沈線　L r 撚糸文	15-10	24	埋土1層	浅鉢		胴部：区画隆線文　R L縄文	15-27
12	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：沈線　R r 撚糸文	15-19	25	埋土	深鉢		胴部：多条沈線文	15-28
13	埋土1層	深鉢	A Ⅰ	胴部：沈線　L r 撚糸文	15-20						

第17図　第４号住居跡出土土器(1)



番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図　版
1	第２埋設	深鉢	ＡⅡ	口縁部：Rl撚糸文　ＬＲＬ縄文	10－１

第18図　第４号住居跡出土土器(2)

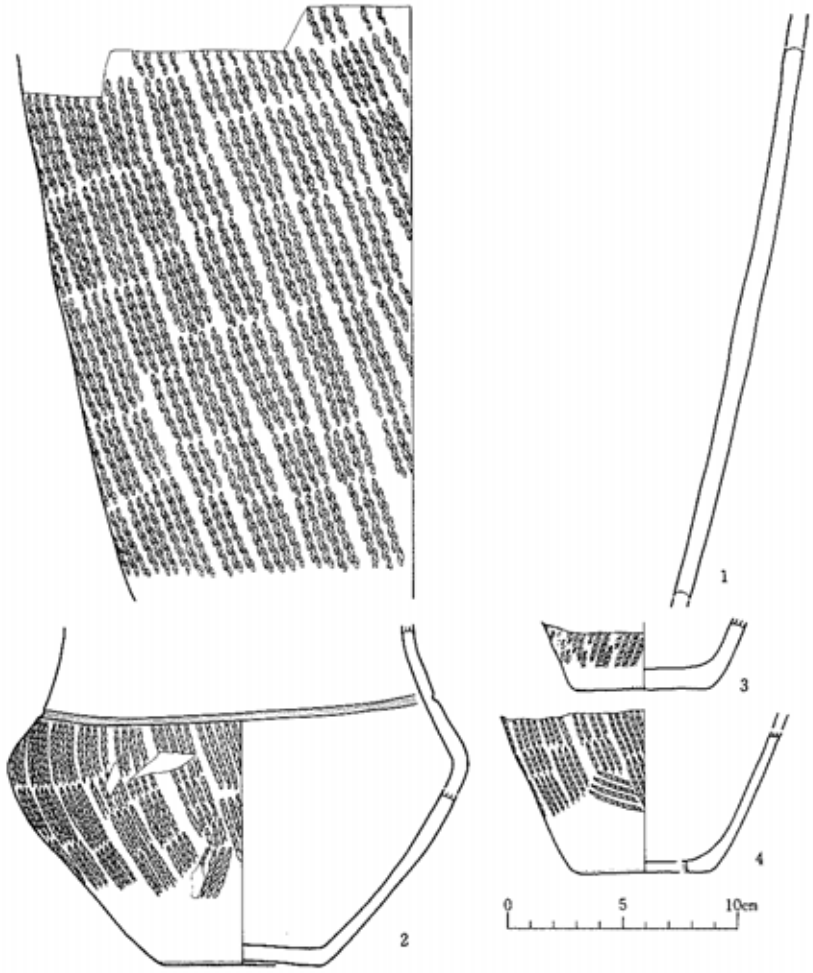
〔壁の状況〕　攪乱をうけている部分の他はほぼ全周する。壁高は約15ｃｍである。ゆるやかに立ち上がり北～西側にかけては黄褐色の砂質シルト層を壁としている。

〔床面〕　明確な床面は検出できず掘り方底面まで下げた。

〔柱穴〕　ピットは全部で５個検出された。このうちピット１は炉の長軸の延長線上にありピット2･5、3･4は炉の長軸とほぼ対称の位置にあることから主柱穴と考えられる。

〔周溝〕　検出されなかった。

〔炉跡〕　炉の主軸はNW－ＳＥ方向である。土器埋設石囲部が住居のほぼ中心に位置し、石組部は壁近くまではのびていない。形態は胴部下半部を欠く深鉢を埋設した土器埋設石囲部、敷



番号	地区・層位	器形	分類	特	徴	図版	番号	地区層位	器形	分類	特	徴	図版
1	炉 埋 設	深鉢	B	胴部	Lr 撚糸文	10－2	3	埋土1層			底部	RLR縄文	
2	床 面				Lr 撚糸文		4	埋土1層			底部	Lr 撚糸文	

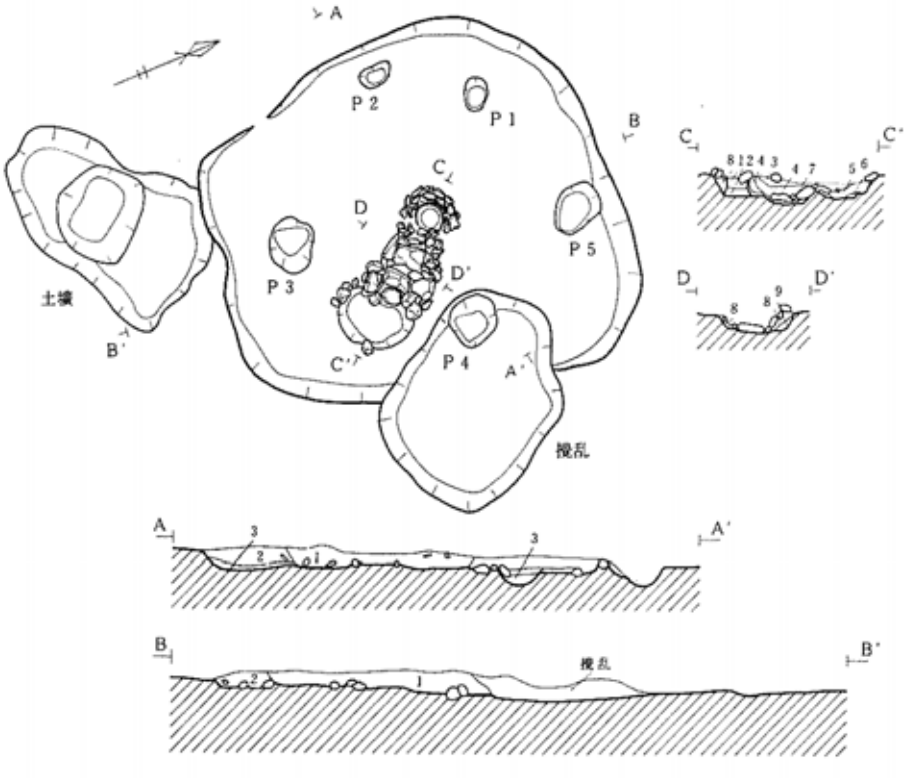
第19図　第４号住居跡出土土器(3)

石石組部、石組部の３つの部分からなる土器理設石組複式炉である。構築法は、掘り方を掘り、胴下半部を欠く深鉢を埋め、土器埋設石囲部、敷石石組部、石組部の順に構築している。

〔出土土器〕

ａ．口縁部が外反するもの(第21図1･2･6)

1は口縁上部が欠損しているが、外反し、胴央部で膨らむ器形と考えられる。隆線によって連結「Ｓ」字状文様が描かれ、円形、楕円形、三角形の区画を生じさせ、区画内にＬＲ縄文が充填されている。2は外反し、胴央部で膨らむもので、文様は「∫」字状の無文帯とその外側に



A－A'　B－B'

番号	土色	土性	備考
1	黒褐色 7.5YR3/1	砂質ローム	粘性有、しまりあり
2	黒褐色 10YR3/2	シルト質ローム	粘性有
3	明黄褐色 10YR6/6	砂質シルト	地山がブロック状に含む

C－C'　D－D'

番号	土色	土性	備考
1	黒色 10YR2/1	砂質シルト	
2	黒色 10YR2/1	砂質シルト	粗砂、小礫を埋はり含む
3	黒褐色 10YR3/1	砂質シルト	
4	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	粗砂、小礫を多く含む
5	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト	粗砂、小礫を多く含む
6	黒褐色 10YR2/3	砂質シルト	層5がブロック状に含む、地山層
7	黒色 10YR2/1	砂質シルト	粗砂を多く含む
8	黒色 10YR2/1	砂質シルト	7よりも地山のブロック多い
9	黒褐色 10YR2/3	砂質シルト	

第20図　第５号住居跡

充填された長楕円形の縄文帯が隆沈線によって区画され、横方向に展開する。6は胴部資料で隆線によって縄文帯と無文帯とを区画している。

b．口縁部が直立するもの(第21図3･4)

3･4ともに地文だけで構成されているもので4は内弯気味に直立するものである。

〈その他の土器〉(第21図7)

口縁部が外反し、胴上部でくびれ、胴央部で膨らみ、胴下部ですぼむ器形で、頸部と胴央部に横位の沈線が施こし、その内部に「⊂」字状の文様等が施文されている。胴下部は連続する

番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	床 埋 設	深鉢	A1	口縁部：変形「S」状文　LR縄文	11-1	5	埋土1層	深鉢			15-31
2	埋土1層	深鉢	A1	口縁部：「∫」字状文様　RLR縄文		6	埋土1層	深鉢	A1	胴部：区画隆線文　LR縄文	15-32
3	埋土1層	深鉢	B	口縁部	15-29	7	埋土1層	無隆土器			8-5
4	埋土1層	深鉢	B	口縁部：Lr撚糸文	15-30						

第21図　第５号住出土土器

縦位の波線が施されている。

埋設土器遺構

調査区のＢＣ－17グリットに位置している。深鉢の口縁部が倒立された状態で埋設されていたもので掘り方も確認した。

〈出土土器〉(第24図)

波状口縁で、口縁部が内弯気味に直立し、胴央部でわずかに膨らみ、下部にむかってすぼむ器形と考えられる。文様構成をみてみると、胴上部に隆線によって4つの横位の長楕円形状の

無文帯を作り出し、その上部、波頂下にはそれぞれ隆線によって「C」字状文や玉抱き文を施こし、玉抱き文の中には刺突がなされている。

炉跡

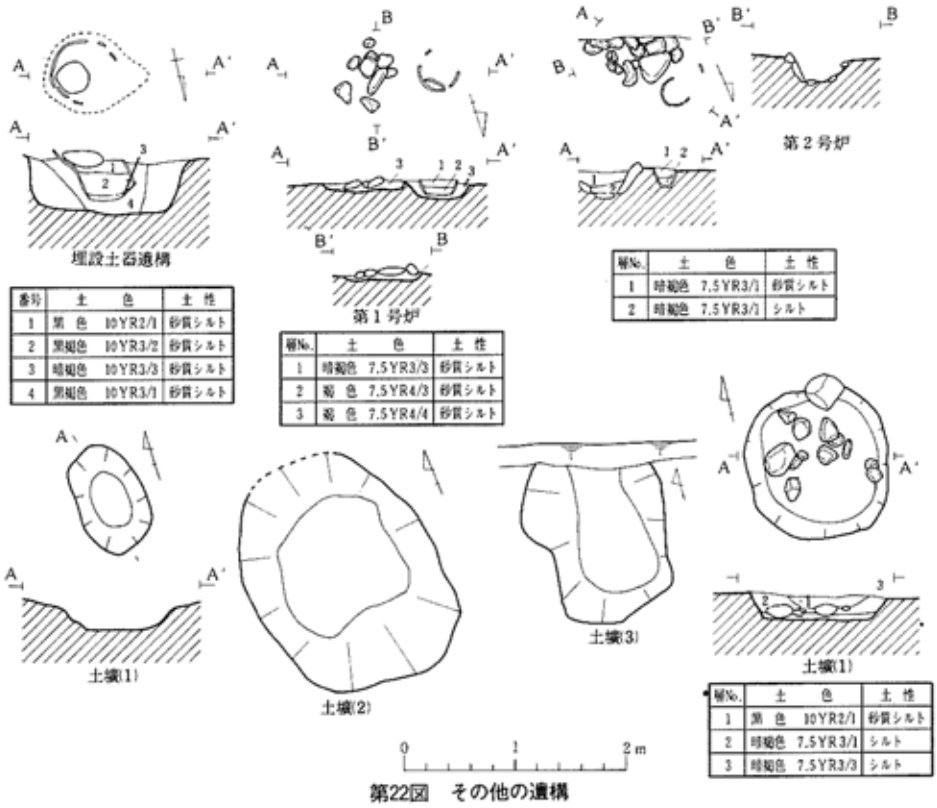
2基の炉が確認された。このうち第2号炉は調査対象区外に延びているため、埋設土器だけを取り上げた。

〈第1号炉〉

調査区のＢＣ－15グリッドに位置する。炉の主軸方向はW－Ｅ方向である。敷石石組部、石組部と考えられる部分がほとんど崩壊し、奥壁の石と、南側壁部の石が一部火熱を受け粘土化して残存していた。土器埋設部には石囲はされず、胴下半部を欠く深鉢が倒立して埋設されていた。

〈第2号炉〉

調査区のＢＫ－17グリッドに位置する。炉の主軸方向はNW－ＳＥ方向である。南側約半分が未調査のため平面形は明確ではないが土器埋設部、敷石石組部が遺存していることを確認し



番号	土色	土性
1	黒色 10YR2/1	砂質シルト
2	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト
3	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト
4	黒褐色 10YR3/1	砂質シルト

層No.	土色	土性
1	暗褐色 7.5YR3/3	砂質シルト
2	褐色 7.5YR4/3	砂質シルト
3	褐色 7.5YR4/4	砂質シルト

層No.	土色	土性
1	暗褐色 7.5YR3/1	砂質シルト
2	暗褐色 7.5YR3/1	シルト

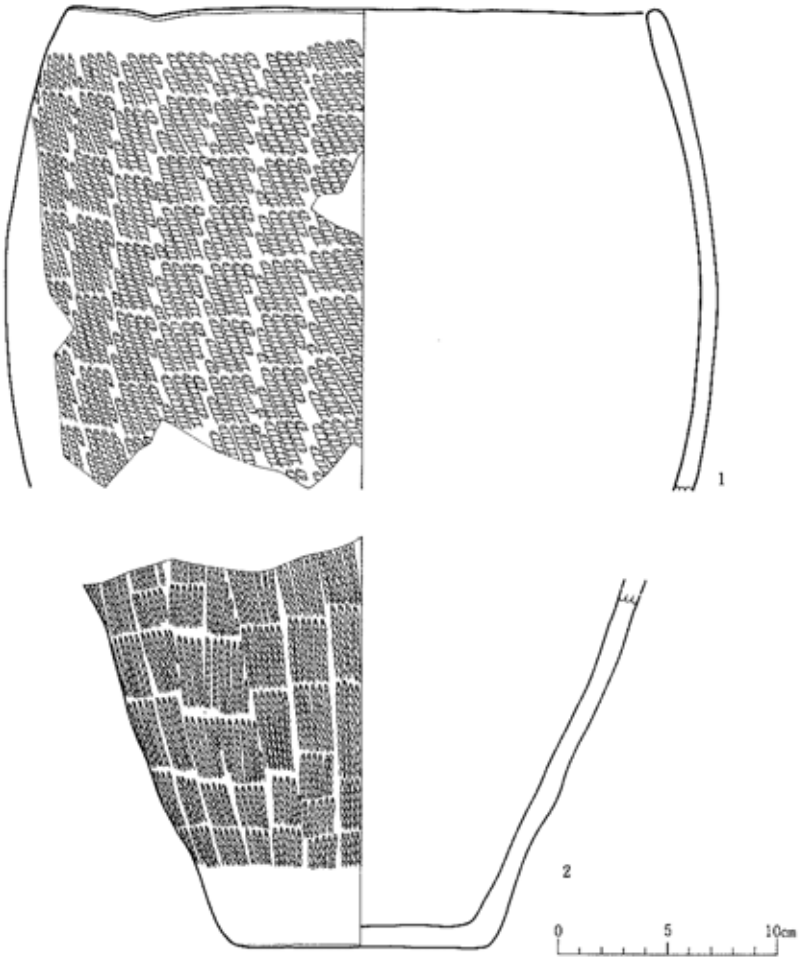
層No.	土色	土性
1	黒色 10YR2/1	砂質シルト
2	暗褐色 7.5YR3/1	シルト
3	暗褐色 7.5YR3/3	シルト

第22図　その他の遺構

た。敷石石組部の奥壁には平坦な石が埋められていた。側壁部をみると西側は残存状態がよいが東側は崩壊している。

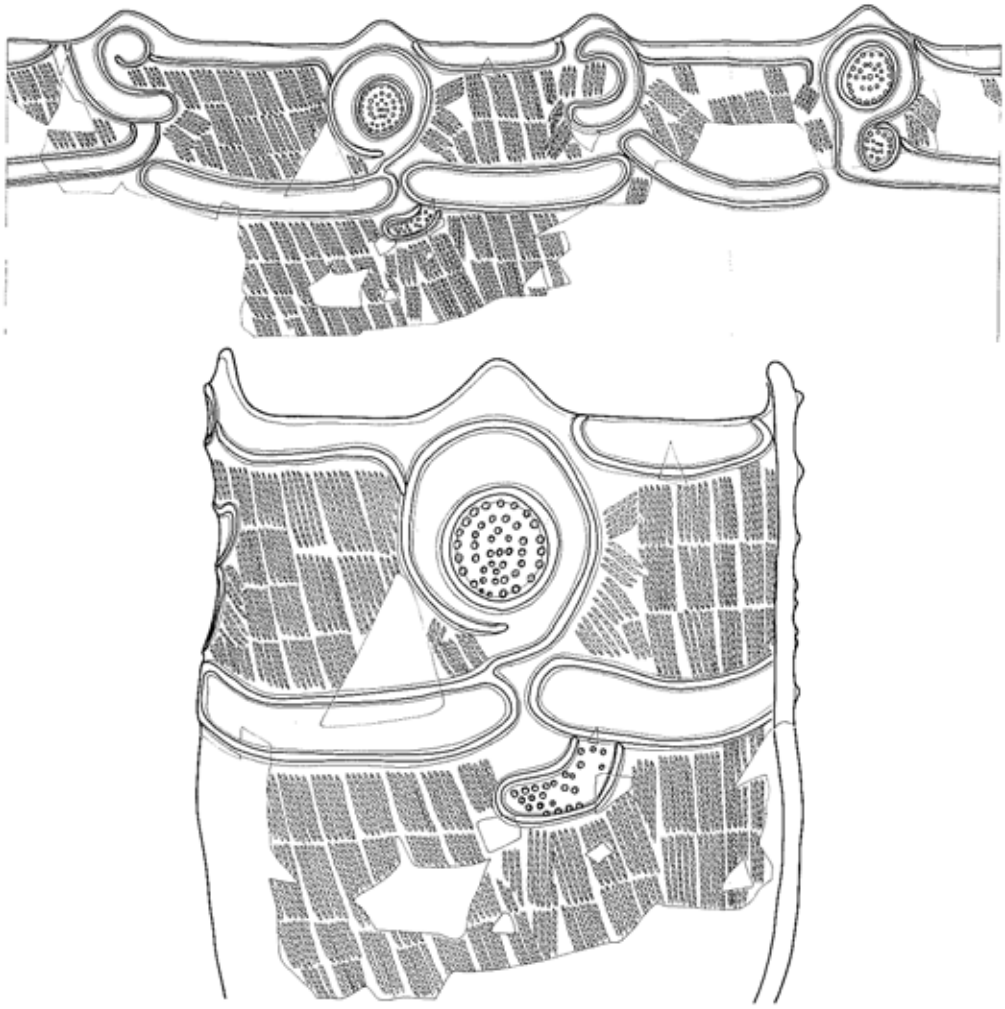
〈第1・2号炉出土土器〉(第23図1・2)

第23図1は胴下半部を欠く。口縁部が内弯する深鉢で、縄文ＬＲが施されている。2は胴上部を欠く。胴部から底部にかけて直線的にすぼむ深鉢で、撚糸文Rℓが施されている。



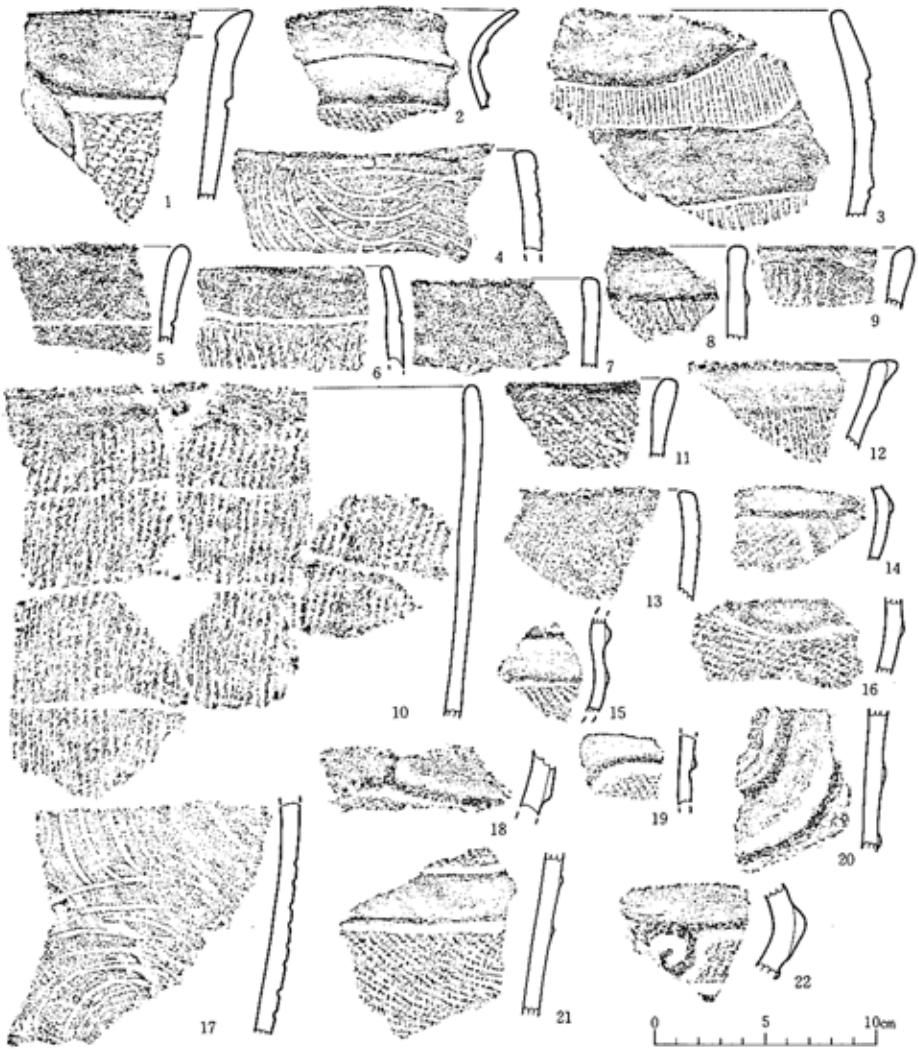
番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	第１号炉	深鉢	C	口縁部：ＬＲ縄文	12-1	2	第２号炉	深鉢		胴部：Rℓ撚糸文	12-2

第23図　第１・２号炉出土土器



番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	埋設土器	深鉢	B	口縁部：玉抜き文　酒糸文RL	11-2

第24図　埋設土器遺構出土土器



番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版	番号	地区・層位	器形	分類	特　　徴	図版
1	Pit 6 埋土	深鉢	A I	口縁部：区画沈線文 R L縄文充填	15-33	12	Pit15埋土	深鉢	B	口縁部： Rℓ撚糸文	15-42
2	Pit 6 埋土	深鉢	A I	口縁部：区画隆線文 LR縄文	15-34	13	Pit15埋土	深鉢	B	口縁部：	15-44
3	Pit 1 埋土	深鉢	C	口縁部：区画隆線文	15-40	14	Pit15埋土	深鉢	A I	胴部：区画隆線文　RL縄文	15-43
4	Pit15埋土	深鉢	B	口縁部：多条沈線	15-39	15	Pit15埋土	深鉢	A I	胴部：区画隆線文　LR縄文	15-46
5	Pit15埋土	深鉢	B	口縁部：頸部に沈線	15-36	16	土壙 3 埋土	深鉢	A I	胴部：区画隆線文　LR縄文	15-45
6	Pit 1 埋土	深鉢	B	口縁部：頸部に沈線 Lr撚糸文	15-35	17	土壙 3 埋土	深鉢	B	胴部：多条沈線文	15-48
7	土壙 1 埋土	深鉢	B	口縁部	15-37	18	Pit 6 埋土	深鉢		胴部：区画隆線文　LR縄文	
8	Pit15埋土	深鉢	B	口縁部：頸部に隆線 Lr撚糸文	15-38	19	Pit 7 埋土	深鉢	A I	胴部：区画隆線文　LR縄文	15-54
9	Pit15埋土	深鉢	B	口縁部：Rℓ 撚糸文		20	Pit14埋土	深鉢	A I	胴部：区画隆線文	15-47
10	Pit15埋土	深鉢	B	口縁部：Lr撚糸文		21	Pit15埋土	深鉢	A I	胴部：区画隆線文　RL縄文	15-50
11	土壙 1 埋土	深鉢	B	口縁部：LR縄文	15-41	22	Pit 9 埋土	深鉢		胴部：	15-49

第25図　土壙ピット出土土器

土壙

土壙からの出土遺物は遺物量が少なく破片資料が大部分のため、その他の出土土器として観察表とともに一括して後述する。

〈第1号土壙〉調査区のＢＣ－13グリッドに位置する。平面形は長軸約210ｃｍ、短軸約170㎝の隅丸方形で、深さは約30㎝である。堆積土は単層で黒色のシルト層である。小礫を多量に含んでいる。

〈第2号土壙〉調査区のＢＣ、ＢＤ－14グリッドに位置する。平面形は長軸約210㎝、短軸170㎝の隅丸方形で深さは約30㎝である。堆積土は単層で黒色のシルト層である。

〈第3号土壙〉調査区のＢＣ－13グリッドに位置する。遺構が調査対象区外へ延びているため平面形は明確ではないが隅丸長方形を呈すると推定される。堆積土は黒色のシルト層である。

〈第4号土壙〉調査区のＢＣ－15グリッドに位置する。平面形は長軸約140㎝、短軸約130㎝でほぼ円形を呈する。堆積土は3層に大別され、黒色または暗褐色のシルト層であり、深さは約30㎝である。壁はやや急に立ち上がる。

〈その他の出土土器〉

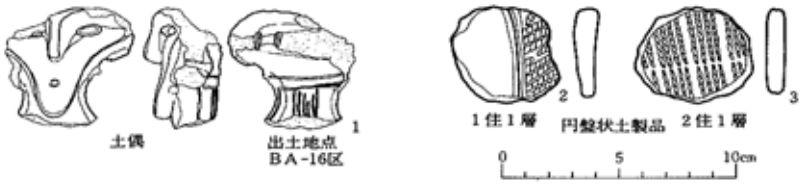
土壙、ピット等から縄文土器が出土しているが、出土量が少なく、ほとんどが破片資料のため特徴のあるものを一括して提示する。

ａ.口縁部が外反するもの(第25図1･2･14～16･18～21)

1は外反し胴部にむかって直線的にすぼむもので、沈線によって文様が描かれ、縄文帯と無文帯とを区画している。2は外反し胴上部で膨らむもので、隆線によって縄文帯と無文帯を区画している。14～16、･18～21は胴部資料で14～16･18･20･21は隆線によって、19は隆沈線によって縄文帯と無文帯を区画しているが、文様は小破片のため明らかではない。

ｂ.口縁部が直立するもの(第25図4～13･17)

4･17は同一個体と考えられる。口縁部が内弯気味に直立し、胴部がやや膨らむもので、弧状の多条沈線文が施されている。5･6は沈線･8は隆線によって縄文帯と無文帯を区画している。



第26図　土製品

c.口縁部が内弯するもの(第25図3)

内弯し胴上部でふくらみ下部にむかってすぼむものである。沈線による区画文で、無文帯の外部に連続する縦位の刻目が施されている。

土製品

土偶(第26図1)

1点のみ出土している。頭部片で頸は顔面に対してまっすぐで胴部に接合するものと思われる。鼻が高く、目は凹み、口はごく僅かな凹みで現わされる。あごは三魚形を呈している。背面をみると横位、縦位の平行沈線が施されている。

円盤状土製品（第26図2･3）

2点出土している。いずれも土器の胴部破片を打ち欠いて整形したもので、平面形は円形を呈している。1は撚糸文のもので、2は隆線によって無文帯と縄文帯とに区画される。

石器

剥片石器

(1) 石鏃(第27図1～8)

いずれも無茎で第27図5･8以外はほぼ二等辺三角形を呈している。2･3は尖頭部が欠損している。2･3･6･7は凹基形で、特に7は基部の抉りが深く両脚状になっている。5･8は非対称で不整形のもので8は加工が粗く他の石鏃より大形である。

(2) 石匙(第27図9･10)

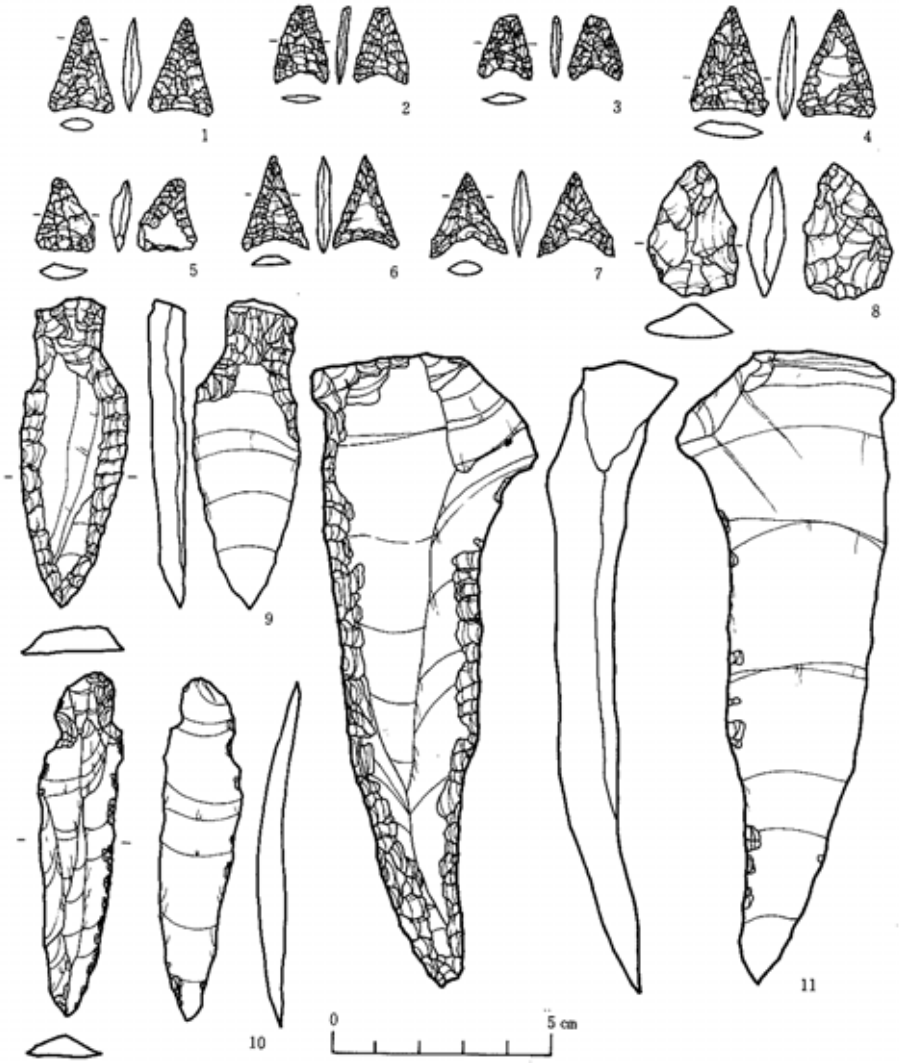
2点出土している。2点とも縦長の形態で、刃部先端が鋭利である。9は背面の側縁に入念な調整剥離を加えており腹面ではくびれ部のみ加工されている。10はくびれ部が作りだされているため石匙に含めたい。刃部の剥離は散漫で剥片の鋭い縁辺がそのまま残されている。

(3) その他の剥片石器(第27図11～第31図7)

第27図11、第28図1～6、第29図5は縦長剥片を素材とし側縁に連続する剥離を加えた石器である。第28図1は両面加工の石器であり一端に直線的な刃部が作りだされている。第27図11、第28図2～6は縦長剥片の主として背面側の両側縁から端部にかけて連続する平坦な剥離を施した石器である。第28図2は腹面側にも一部加工される。どの石器も鋭利ではないが先端部を作りだしている。第28図1、第29図4をみると素材の段階で末端に厚みのある剥片が選択されていて、その端部に急角度のスクレイパー状のエッヂが形成されている。調整はほぼ平坦な剥離が連続するが、第28図3のみ急角度な刃つぶし状の剥離がみられる。

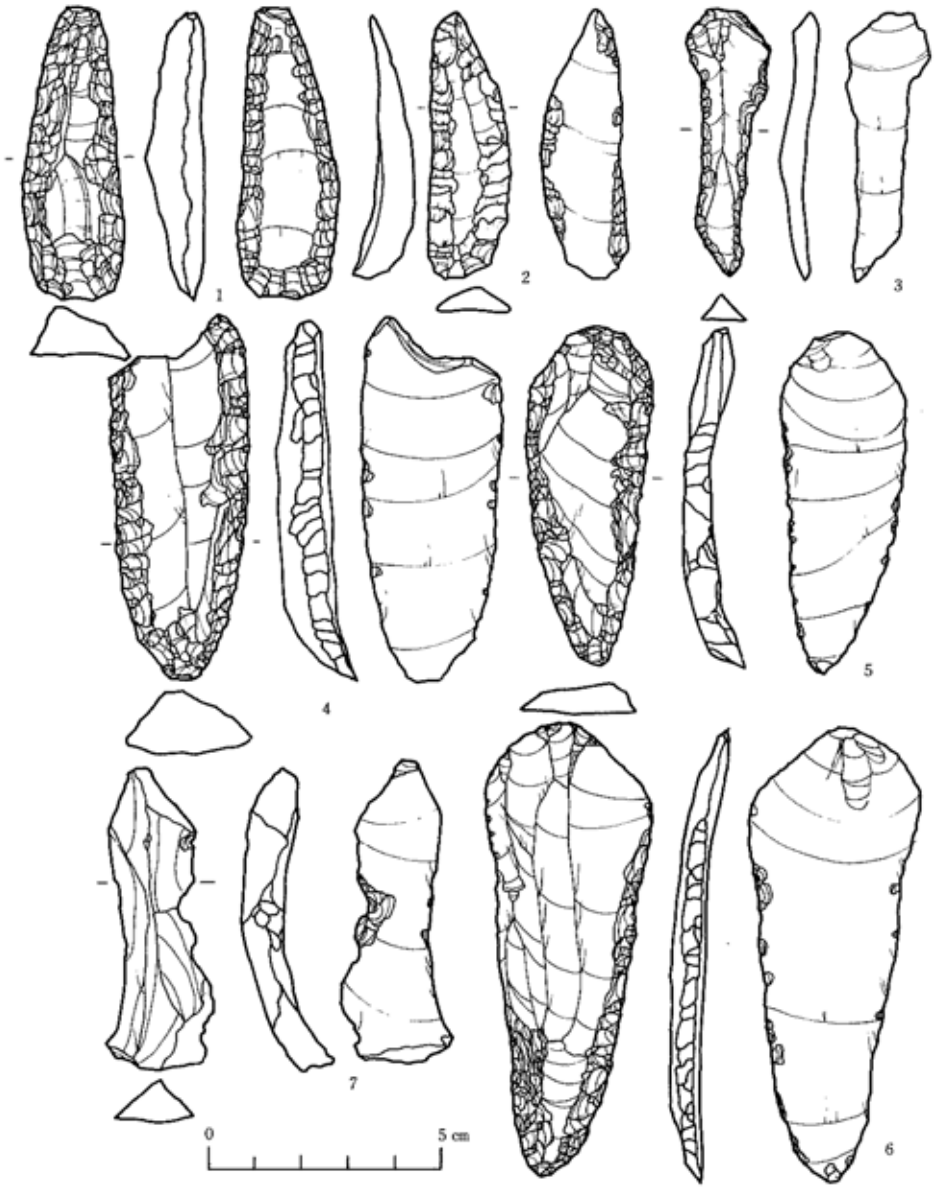
第28図7は剥片の側縁にノッチを作り出した石器である。

第29図1～7、第30図1・2は剥片の縁辺に連続する剥離を施しているが、石器の形態に規



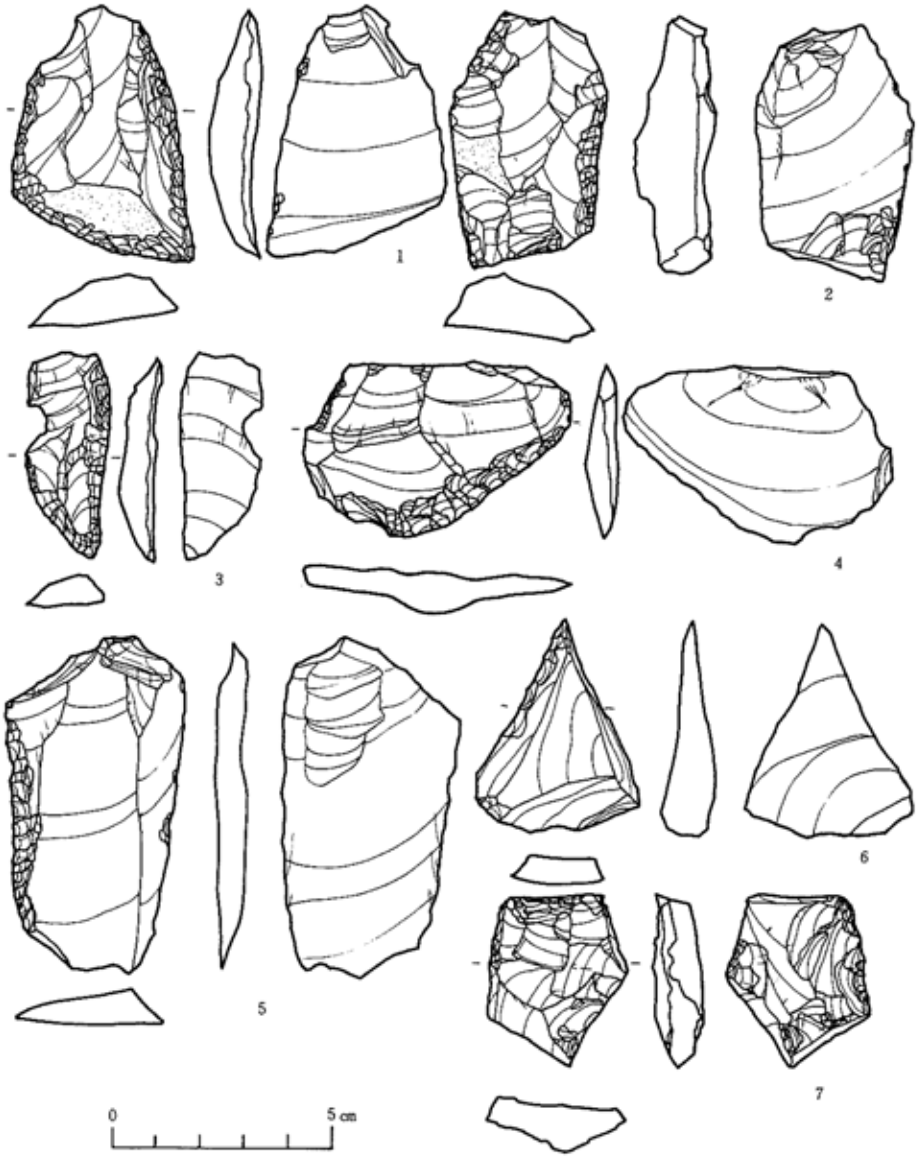
番号	地区・層位	石　材	重さ(g)	長幅(mm)	厚(mm)	図　版
1	2住2層	頁　岩	0.6	21	2.7	16－1
2	3住床面	頁　岩	0.4	16	1.5	16－2
3	2住1層	黒曜石	0.3	16	2.1	16－3
4	3住2層	頁　岩	1.4	22	4.0	16－4
5	3住　炉	玉ヅい	0.5	14	1.1	16－5
6	3住床面	頁　岩	0.7	20	3.0	16－6
7	3住床面	頁　岩	0.5	16	3.0	16－7
8	x － x	頁　岩	5	29	6.1	16－8
9	3住2層	頁　岩	14.5	67.1	7.9	16－9
10	x － x	頁　岩	7.5	79.1	4.1	16－10
11	3住床面	珪質頁岩	90	129.3	19.3	16－13

第27図　石　器 (1)



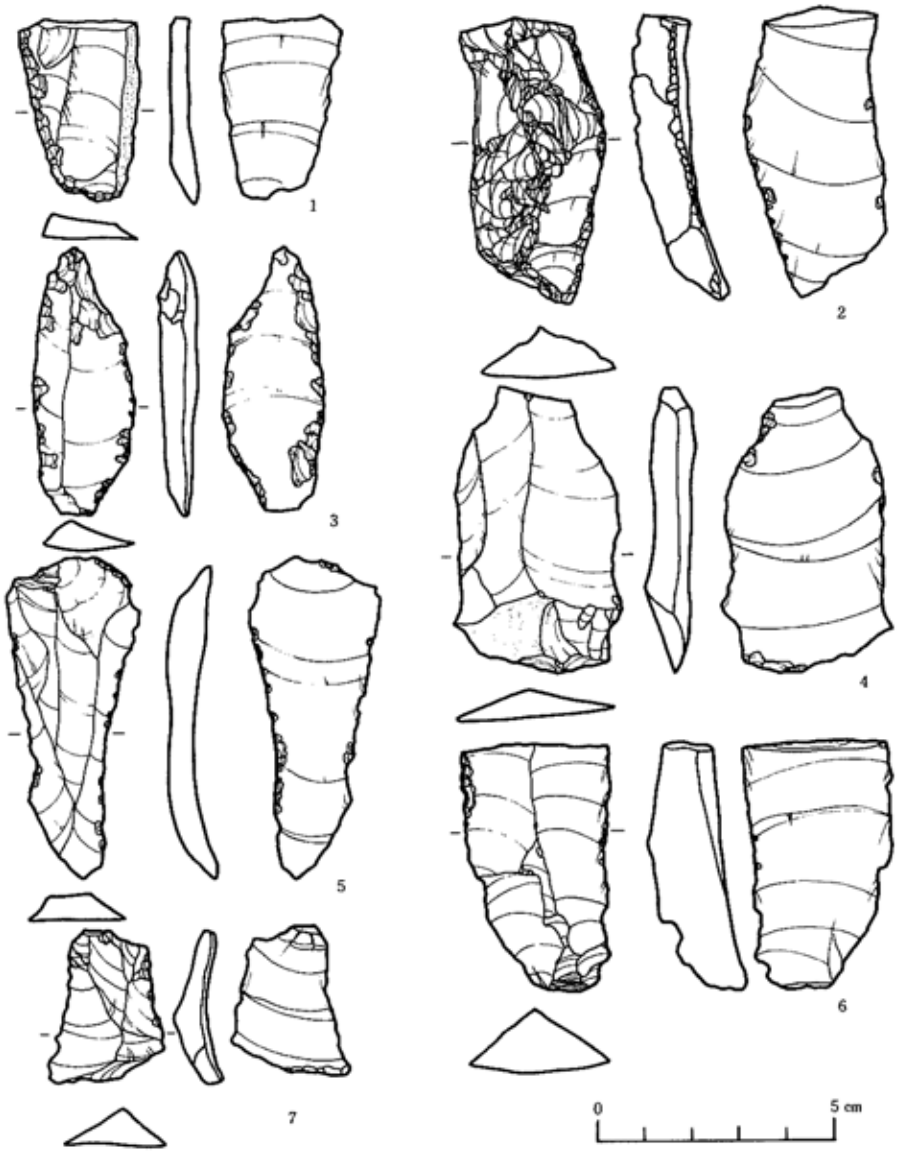
番号	地区・層位	石　材	重さ（g）	長幅(mm)	厚(mm)	図　版
1	1住2層	珪質頁岩	19.3	69.2	11.1	16－12
2	3住床面	珪質頁岩	10.9	58.0	9.0	16－11
3	BD－17	珪質頁岩	6.3	60.0	4.1	16－14
4	x － x	珪質頁岩	32.6	72.1	11.3	16－15
5	1住2層	珪質頁岩	18.5	68.2	4.3	16－16
6	3住床面	珪質頁岩	30.0	77.6	2.0	16－17
7	x － x	珪質頁岩	12.6	61.4	7.1	16－18

第28図　石　器（2）



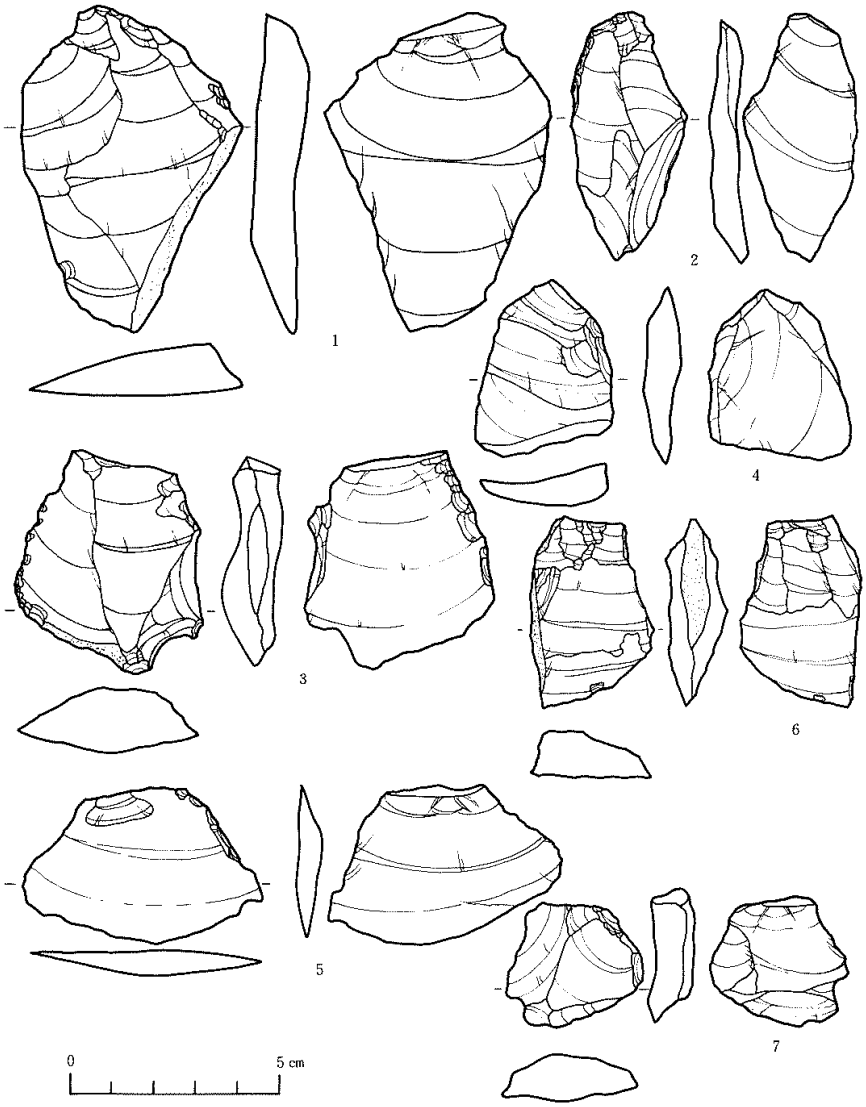
番号	地区・層位	石　材	重さ（g）	長幅(mm)	厚(mm)	図　版
1	2住1層	珪質頁岩	25.5	119	8.4	16－19
2	x － x	珪質頁岩	30.4	53.7	9.2	16－20
3	3住床面	珪質頁岩	6.9	49.1	6.3	16－21
4	1住3層	珪質頁岩	24.3	37.2	6.8	16－22
5	x － x	頁　岩	27.1	69.3	7.0	16－26
6	x － x	頁　岩	16.5	44.7	7.3	16－27
7	1住3層	珪質頁岩	22.5	35.4	6.8	16－23

第29図　石　器（3）



番号	地区・層位	石　材	重さ（g）	長幅(mm)	厚(mm)	図　版
1	A0·AP-13	頁　岩	8.6	41.0	6.0	16－24
2	3住床面	珪質頁岩	20.4	67.1	9.2	16－25
3	3住1層	珪質頁岩	2.8	59.4	6.2	17－1
4	3住床面	頁　岩	23.0	64.2	6.4	17－2
5	3住床面	珪質頁岩	12.7	70.1	4.7	17－3
6	2住2層	珪質頁岩	24.0	56.0	10.2	17－4
7	1住2層	珪質頁岩	6.6	32.1	6.1	17－5

第30図　石　器（4）



番号	地区・層位	石　材	重さ（g）	長幅(mm)	厚(mm)	図　版
1	1住2層	珪質頁岩	41.8	74.0	12.3	17－6
2	3住床面	珪質頁岩	10.5	55.2	7.2	17－7
3	1住2層	珪質頁岩	33.5	46.0	11.7	17－9
4	3住床面	珪質頁岩	14.8	36.4	7.4	17－8
5	2住1層	珪質頁岩	14.5	49.1	6.7	17－11
6	3住床面	玉ずい	13.1	39.3	4.9	17－10
7	3住床面	珪質頁岩	11.1	25.0	9.2	17－12

第31図　石　器（5）

	地区・層位	長さ(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考	図版
1	x − x	11.2	5.3	2.7	350		
2	1住2層	9.0	3.8	1.9	260		17−13
3	3住床面	10.9	4.1	1.9	250		17−14
4	1住炉内	11.4	6.8	3.1	540	床面に凹み　磨痕	17−16
5	3住炉内	7.8	5.3	3.7	430	片面に磨痕	17−17
6	3住1層	5.9	4.5	2.7	280	片面に磨痕	17−18
7	3住床面	4.5	4.3	3.2	275	片面に磨痕	17−19
8	BD−18	11.6	3.6	3.4			17−15

第32図　石　製　品

格性の認められないものである。第29図1・3は複数縁辺に連続する剥離がなされ、それらの収束する一端が尖端部になっている。6は折面と剥離で尖端部を作り出しているようにみえる。第29図2は背面側の2個縁に連続する剥離がある他に打面部と末端部が切断されていて折面上から腹面側に剥離がなされている。第29図1～6の調整は剥片の鋭い縁辺に平坦な剥離が加えられ刃部角度をみると40～60°と鋭角的である。第29図7は下方が折断面であり、これらの折面と側面上から両面に深い剥離がなされる。第30図1～2は縦長剥辺の縁辺に細かく連続する剥離がなされる。

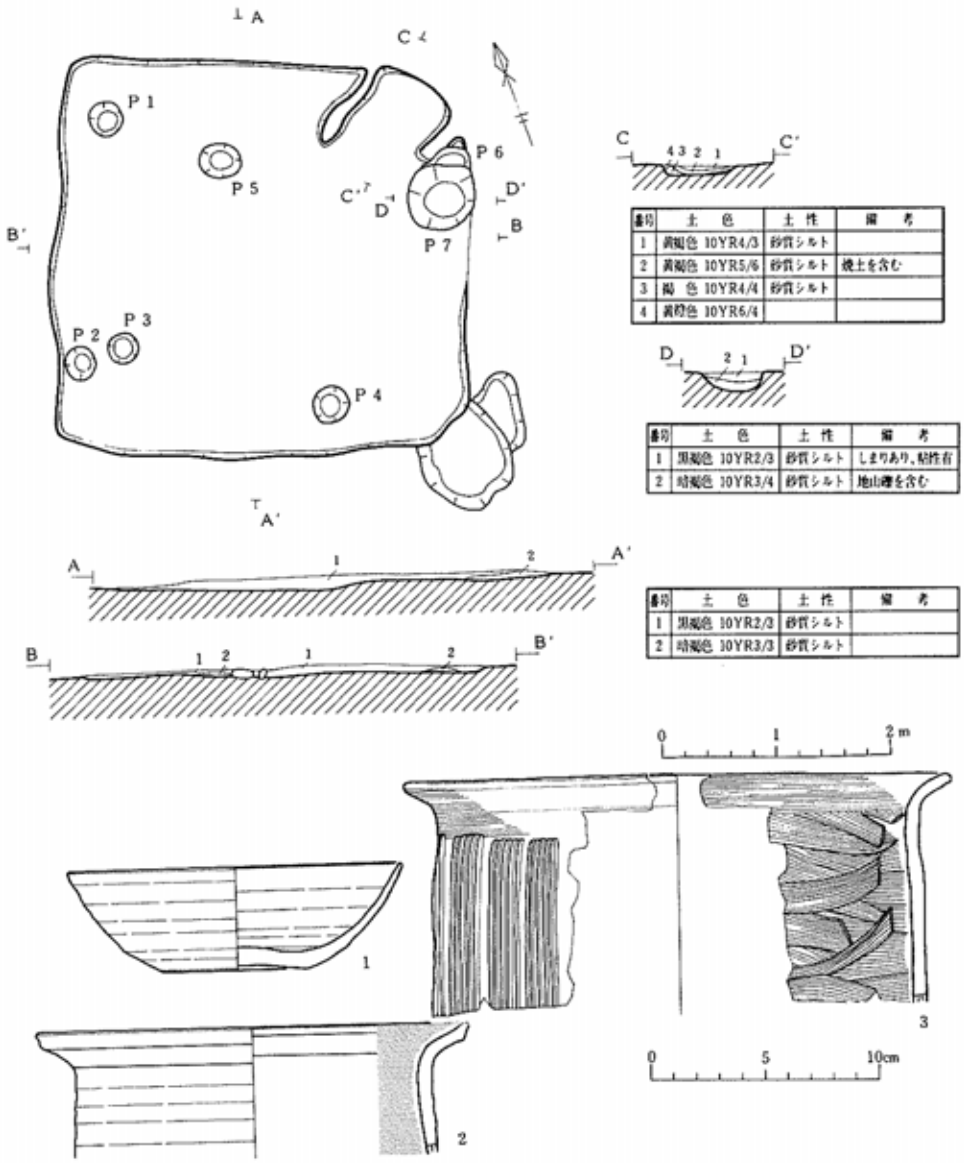
第31図6は非頁岩石材を用いた石器で、石核かもしれない。

第30図3～7、第31図1～4・5・7は縁辺に散漫な剥離がなされている剥片である。

〈縦長の剥片について〉

本遺跡には第27図11、第28図1～6、第30図1～6のように縦長剥片を素材とした石器がある。縄文時代の剥片剥離技術は、作業面が1面のもの、２面のもの、あるいは3面以上の作業面を転々と移動するものなど多様だが、一般的に石核調整は未分化で、石核素材の形態と大きさが剥離技術を大きく規定している。従って生産される剥片は大きさ、形態にまとまりがないのだが、まれに条件がそろって、固定的な打面、作業面から連続して剥片が剥離される場合には縦剥長の剥片も生じる。第30図7はそのような偶発的な縦長剥片である。しかしながら本遺跡の縦長剥片をみるとその多くは両側縁が平行し、背面には稜が通り、形態がよく整っている。背面構成は腹面と同方向の打撃による剥離が多く、連続して同様な形態の剥片がとられていることがわかる。第30図では背面中央から左右に連続する剥離があり、作業面上の稜線の存在を意識して剥離作業が進められているようにみえる。稜調整の痕跡をしめす片は蔵王町二屋敷遺跡(1984：加藤・阿部・小徳、報告書第344図1)にも認められる。縦長剥片中最大の第28図13は末端に下設打面をとりこんでおり、両設打面石核も存在したことがわかる。それに縦長剥片の多くが10㎝前後の大きさを有する点を考えあわせると本遺跡の縦長剥片が偶然生じたものとは考えにくい。むしろ意図的に打面、作業面を固定し、作業面の形態や稜を意識した剥片離技術があったのではないかと予想される。

縦長剥片を2次加工の点からみると、両側縁加工のスクレイパー(第27図11、第28図1～6)という特定の石器に結びつく様であり、石器製作の流れの中で他の剥片石器と異なった位置づけがなされているように思われる。同時期の他遺跡ではこの様な縦長剥片が認められない場合が少なくないが、先の二屋敷遺跡、菅生田遺跡(1982:丹羽、阿部、小野寺)では出土例があり、大木10式期ごろに特徴的に認められる石器のようである。ただし石核、接合資料を含めまとまった量の石器が出土した例はなく剥離技術の実体とその稀少性の意味するところは今後の検討課題である。



番号	土色	土性	備考
1	黄褐色 10YR4/3	砂質シルト	
2	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	焼土を含む
3	褐色 10YR4/4	砂質シルト	
4	黄橙色 10YR6/4		

番号	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR2/3	砂質シルト	しまりあり、粘性有
2	暗褐色 10YR3/4	砂質シルト	地山礫を含む

番号	土色	土性	備考
1	黒褐色 10YR2/3	砂質シルト	
2	暗褐色 10YR3/3	砂質シルト	

番号	層位	種類・器形	外面	内面	口径	底径	器高
1	床面	須恵器・坏	ロクロナデ・回転糸切	ロクロナデ	14.5	6.2	4.7
2	床面	土師器・甕	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラミガキ調整	(18.6)		
3	床面	土師器・甕	刷毛目・横ナデ	ヘラナデ・横ナデ			

第33図　第6号住居跡・出土土器

磨製石斧(第32図2・3)

2は完形品で、3は刃部が破損している。2・3とも基部の幅が端部から刃部にむかってゆるやかに広がり、基部横断面は上下面側に膨みをもつ長方形で2は刃部の側面は左右対称になる。3は刃部に刃こぼれがみられる

凹石・磨石(第32図1・4～7)

1は棒状のもので4・5は楕円形、6・7は円形である。4～7はそれぞれ片面だけに磨痕、凹みがみられる。

浮子(第32図8)

平面形は長惰円形を呈し、上部に円状の孔が開けられており、水に浮くように軽い石材を利用している。

b.平安時代

第6号住居跡

〔重複・増改築〕　住居南側コーナーでピットと切り合っている。住居がピットを切っており、ピットよりも新しい。

〔平面形・方向〕　調査区のＢＨ・ＢＧ15－16グリッドに位置している。径は長軸約3.6m、短軸約3.6mの方形を呈している。住居の北東隅にカマドが構築される。

〔壁の状況〕　ほぼ住居全体に遺存しており、床面からの高さは、高い部分で6㎝で、ゆるやかに立ち上がる。

〔床面〕　東側にはり広されている部分がある。西側は砂質の地山から成り、所々東側と同質の固い土が点在した。

〔柱穴〕　ピットは全部で7個検出された。住居北東隅(カマドの東側)に貯蔵穴状ピットが認められる。平面形は、径60㎝程の不正円で、底面からの深さは約25㎝である。他のピットの中で柱穴と考えられるものもあるが柱間尺が不規則である。

〔周溝〕　検出されなかった。

〔カマド〕　住居の北東隅にカマドが構築されている。東側壁部は残存状態が良好ではないが、燃焼部側壁部は粘土で固めて作られていた。燃焼部底面は、ほぼ平坦で奥壁部でゆるやかに立ち上がる部分がある。煙道は検出されなかった。

〔出土土器〕

土師器(第33図2・3)

坏が1点、甕が7点出土している。坏は口縁部破片で、全体的に摩滅しているが、外面にロクロナデ、内面に黒色処理が認められる。甕はいずれも口縁部から体部上半までの破片で、長胴形であると考えられる。これらは製作にロクロを使用しているものと(第33図2)、してい

ないもの(第33図3)とがある。前者は体部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で強く外反し、端部が丸味をもちやや上方につまみあげられている。外面にはロクロナデ、内面にはヘラミガキ、黒色処理が認められる。後者は体部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で強く外反するものである。外面の体部には縦方向の刷毛目、口縁部から頸部にかけて横ナデ、内面体部には横方向の刷毛目、口縁部から頸部にかけて横ナデ、内面体部には横方向の刷毛目、口縁部には横ナデがそれぞれ施されている。また外面と内面の刷毛目の幅が異なるため、別々の施文具を用いたと考えられる。その他図示できなかったが外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が認められる破片がある。

須恵器(第33図･1)

〔坏〕　底部から口縁部までゆるやかに外傾するものである。底部の切り離しは回転糸切りである。内面のロクロ目は外面に比べ、あまり明瞭でない。

本住居跡出土遺物において、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている土師器坏、甕がある。このような特徴をもつ土師器は、東北地方南部における表杉ノ入式(氏家:1957)に比定することができ、これらと共伴する他の土師器甕、須恵器坏も同時期のものと考えられる。ただし遺物量が少ないため、表杉ノ入式期のどの時期に位置づけられるかについては明確ではない。

Ⅴ．考　　察

今回の調査において縄文土器は、各住居跡、埋設土器遺構、土壙、ピット等から出土している。ここでは器形、文様が明らかな復元資料を中心に土器の検討をしてみたい。

器形と文様

Ａ．口縁部が外反もしくは外傾するもの

（Ⅰ）　外反するもの(第5図、第6図1、第13図7、第21図1･2)

第5図、第6図1、第13図7、第21図1は、いずれも口縁上部が欠損しているが、胴上部で膨らみ、下部ですぼむ器形と考えられる。文様をみると第5図は隆線による玉抱連結「Ｓ」字文様が描かれ、その外側と玉の内部に撚糸文が充填されている。第6図1は各部分連結の「∫」字状文様が沈線によって描かれ、その外側に縄文ＲＬＲが充填されている。第13図7、第21図2は「∫」字状文様が隆沈線によって描かれ、その外側に縄文が充填されている。第21図1は隆線によって連結「Ｓ」字状文様が描かれ、円形、楕円形、三角形の区画を生じさせ、区画内に縄文LRが充填されている。

（Ⅱ）　外傾するもの(第13図1、第18図)

ａ．文様をもつもの(第13図1)

外傾し、胴部にむかって直線的にすぼむもので文様をみてみると「∫」字状文様が隆沈線によって描かれ、その外側に縄文が充填されている。

ｂ．地文だけのもの(第18図)

外傾し、胴部にむかってすぼむもので、頸部に横位の沈線を巡らし、地文帯と区画している。

Ｂ．口縁部が直立するもの

ａ．文様をもつもの(第17図4、第24図)

第17図4は幅の広い無文帯と縄文帯を沈線によって区画している。第24図は埋設土器遺構の出土土器で、波状口縁を呈し、胴部で僅かに膨らむもので、隆線によって4つの長楕円の無文帯を作り出し、その上方(波頂下)に「Ｃ」字状文、玉抱文様が描かれる。玉の内部には円形の刺突がなされる。

ｂ．地文だけのもの(第9図1･2)

第9図1は頸部に横位の沈線を巡らし、無文帯と縄文帯を区画しているが第9図2は区画線を巡らさず、地文だけのものである。

C.口縁部が内湾するもの(第14図12)

地文だけのもので第14図12は頸部に横位の沈線を巡らし、地文帯と無文帯とを区画している。

〈土器の共伴と編年的位置〉

本遺跡から出土した縄文土器は、文様をもつものを中心に3つに分類された。これを出土状況でみると(表参照)ＡＩ類「∫」字状様とＡＩ類の玉抱連結「Ｓ」字状文様は第1住で共伴している事、また同様の器形、文様をもつ土器が第3住でも出土している事から、ほぼ同一時期のものと考えられる。とすればこれらの文様もつ土器とＣ類についても一定の組み合わせをもつものとみる事が可能である。第4号住出土のＢ類については文様は明確ではないが、文様表現技法などの特徴が上記のものと類似しており年代的には大きく隔たらないものと思われる。また埋設土器遺構出土の深鉢も玉抱き文でありほぼ同時期と考える事ができる。

この様な特徴をもつ土器は菅生田遺跡(丹羽・阿部・小野寺:1982)第Ｉ群土器に類例がみられ、縄文時代中期末葉、大木10式第Ⅱ段階に位置付けられるものと考えられる。

表Ｉ

	A(Ⅰ)	A(Ⅱ)	B	C
1 住	玉抱「S」字文「∫」字状文様			
2 住			地　文	
3 住	「∫」字状文様	「∫」字状文様		地　文
4 住		地　文	区 画 文	
5 住	変形「S」字状文様			

Ⅵ. まとめ

1. 観音堂遺跡は広瀬川右岸の河岸段丘上に立地している。
2. 今回の調査の結果、縄文時代と平安時代の遺構・遺物が発見された。縄文時代の遺構として中期末葉の竪穴住居跡5軒、炉跡2基、埋設土器遺構、土壙等が検出されている。遺物として上記の遺構に伴う土器が出土している。また土器以外では土偶、円盤状土製品、石器等が出土している。平安時代の遺構としては竪穴住居跡1軒が検出され、遺物としては土師器、須恵器が出土している。
3. 発掘調査区外に延びる遺構は現状保存とした。

「引用・参考文献」

伊藤信雄(1980):「古代史ー縄文式文化の変遷」宮城県史I

氏家和典(1957):「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14揖

小野寺祥一郎(1980):「金取遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第70集

加藤・阿部・小徳(1984):「二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第99集

後藤勝彦他(1972)「中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史』

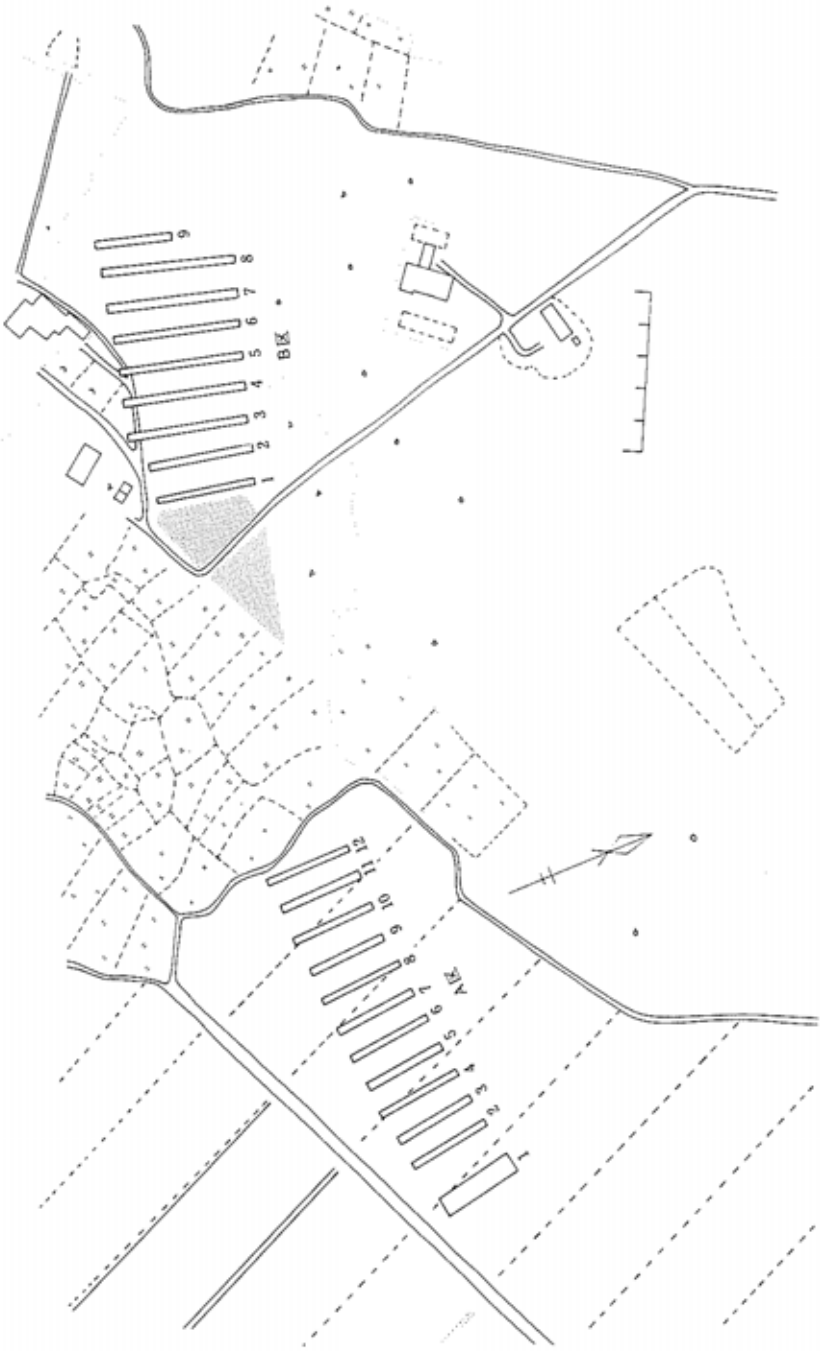
千葉宗久(1980):「玉造遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第68集

丹羽茂(1980):「大木式土器」『縄文文化の研究』第4巻

丹羽・阿部・小野寺(1982):「菅生田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第92集

宮城県教育委資会(1978):「上深沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第52集

新宮前遺跡



新宮前遺跡グリット配置図

調査の概要

調査は60年8月1日から開始された。発掘調査はA・B区に分けA区発掘後、B区の発掘を行った。まずA区の一番東側に6m×27mのトレンチを設定し、遺構、土層等の確認を行った。その後第2～11トレンチ(3m×25～27m)を6m間隔で設定し、遺構確認作業を行った。その結果遺構は発見されず図化はできないが奈良～平安期の土師器と須恵器の小破片を確認した。

基本層位は3層に大別され、1層は表土、2層はローム漸移層で、3層は黄褐色のロームである。

B区においてはまず雑木撤去後、道路をはさんだ東西部分約400m^2(図　の斜線部分)の遺構確認を行った。その後第1～9トレンチ(3m×30～33m)を6m間隔で設定し、遺構確認作業を行った。遺構、遺物は発見されなかった。

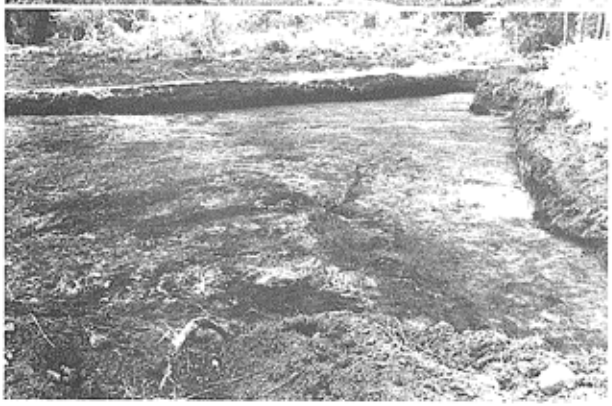
トレンチNoはA・B区ともに東側からアラビア数字で示した。

調査時において$\frac{1}{20}$のトレンチ配置図、断面図、写真撮影及びレベルの記入を行い12月27日に一切の作業を終了した。

写　真　図　版

新宮前遺跡の遠景（北から）①

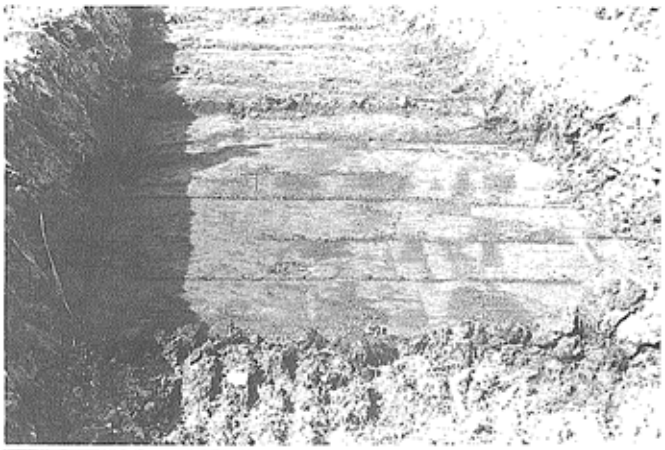
新宮前遺跡の遠景（北から）②



新宮前遺跡掘り下げ情景③

図　版　1

新宮前遺跡
トレンチ試掘状況①

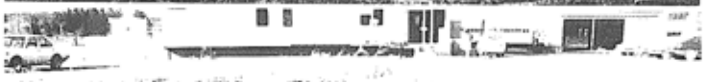


新宮前遺跡
トレンチ試掘状況②

新宮前遺跡
トレンチ試掘状況③

図 版 2

観音堂遺跡発掘状況(東から)①



観音堂遺跡発掘状況(南から)②

観音堂遺跡住居跡(北から)③

図 版 3

第１号住居跡

第２号住居跡

第３号住居跡

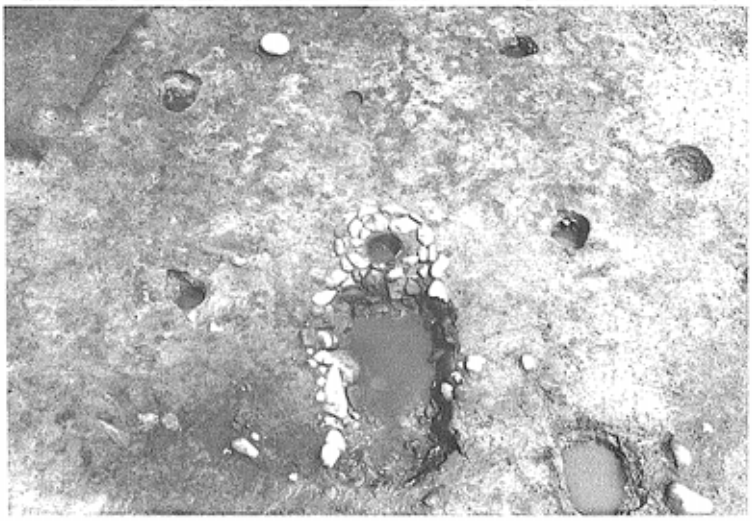
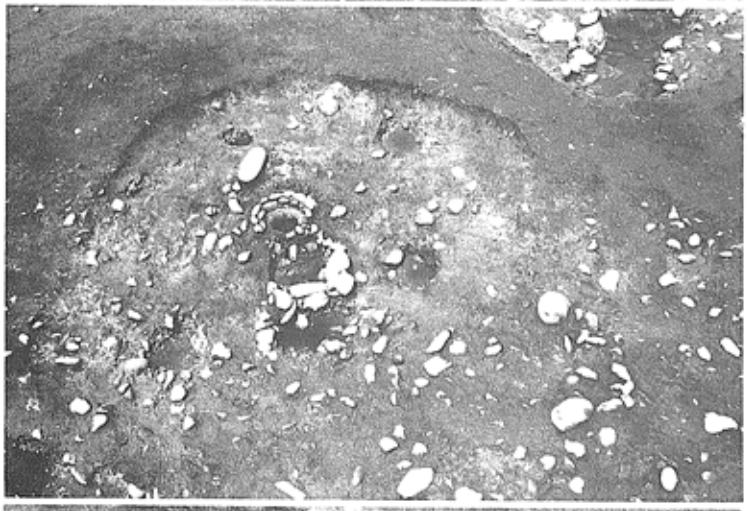
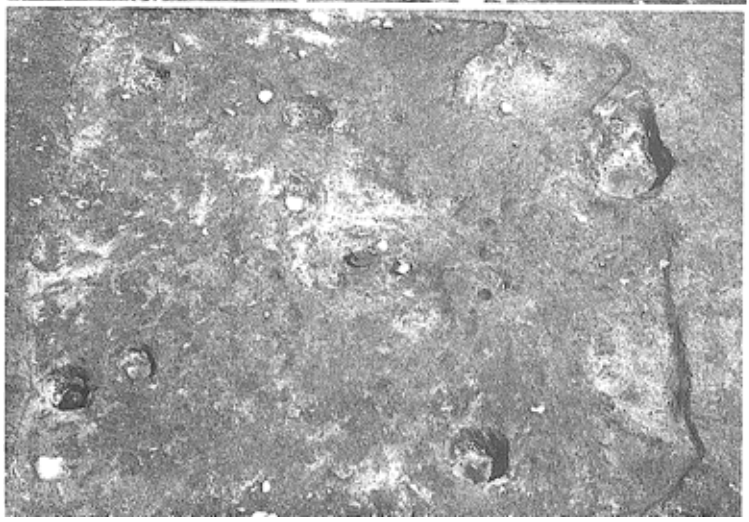


図　版　４

第４号住居跡

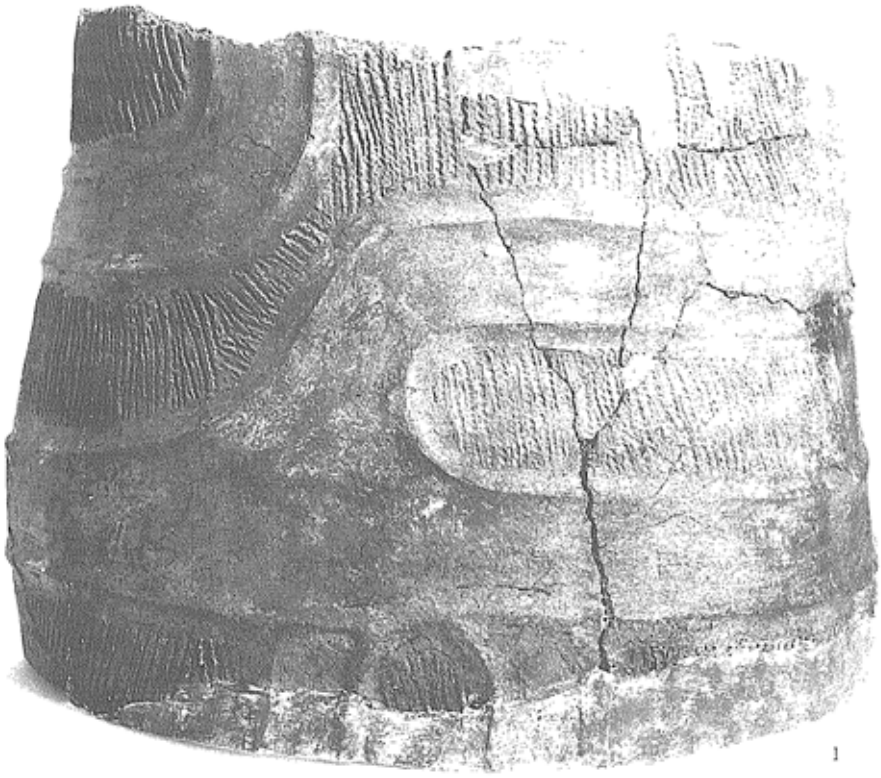


第５号住居跡



第６号住居跡

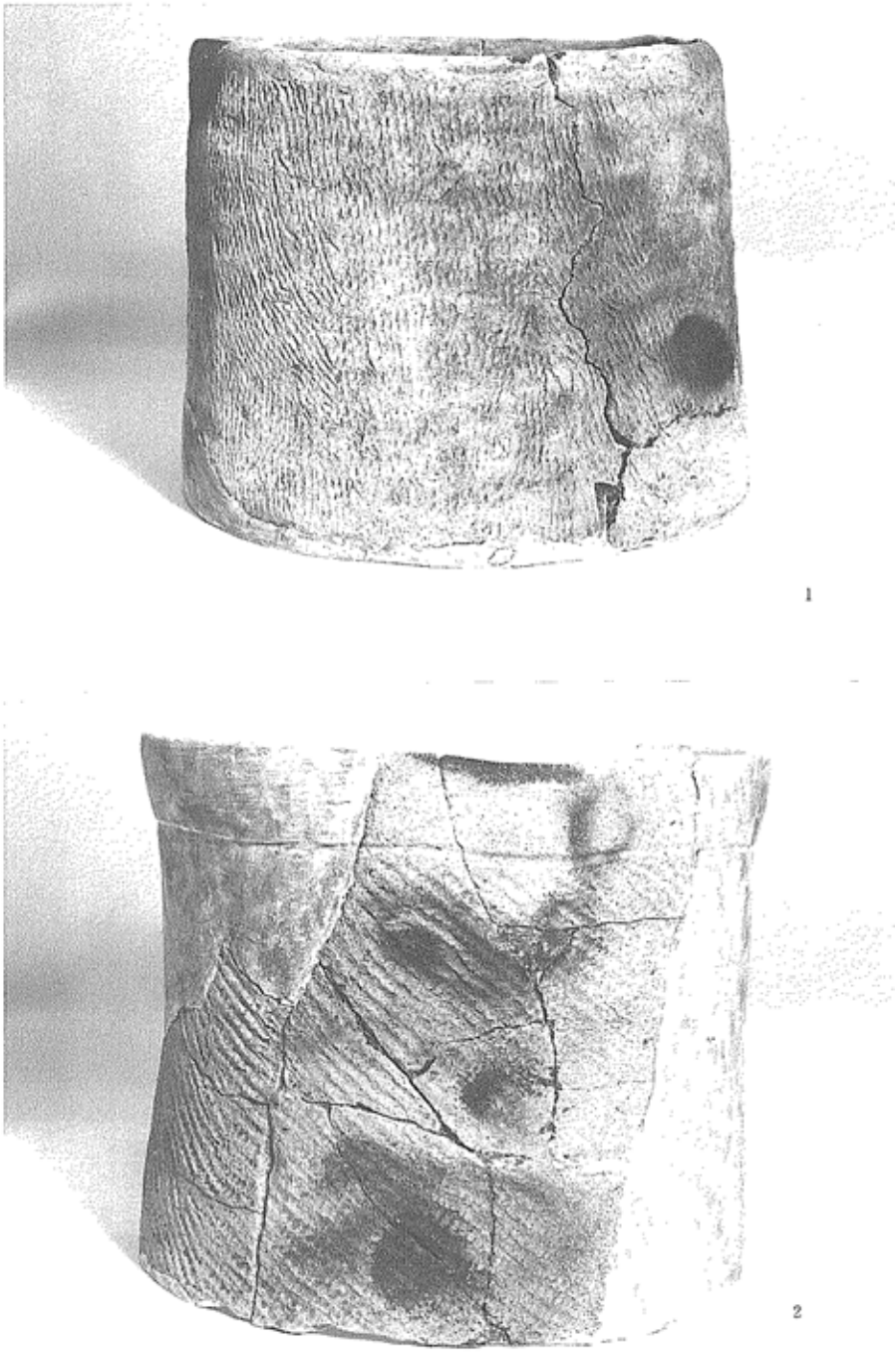
図　版　５



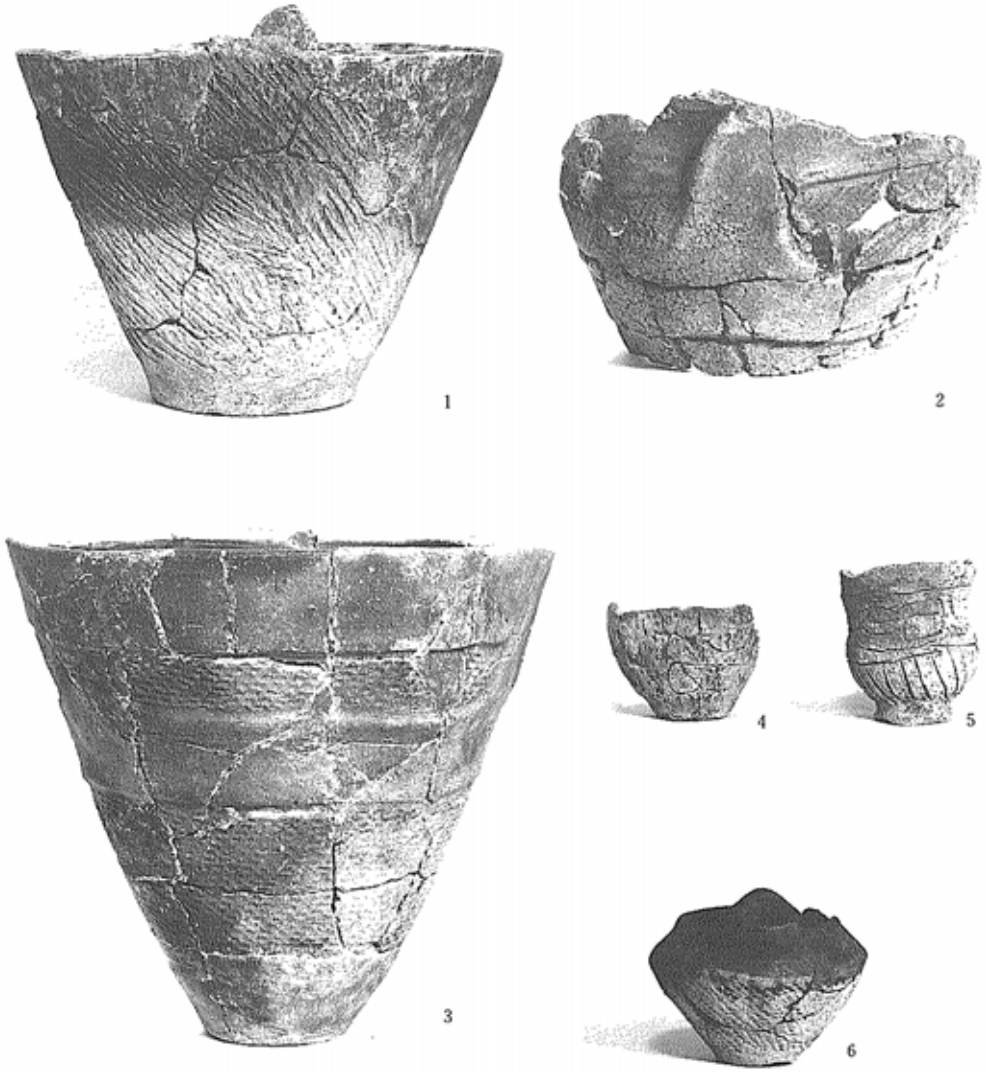
1

2

図版６　第１号住居跡出土土器

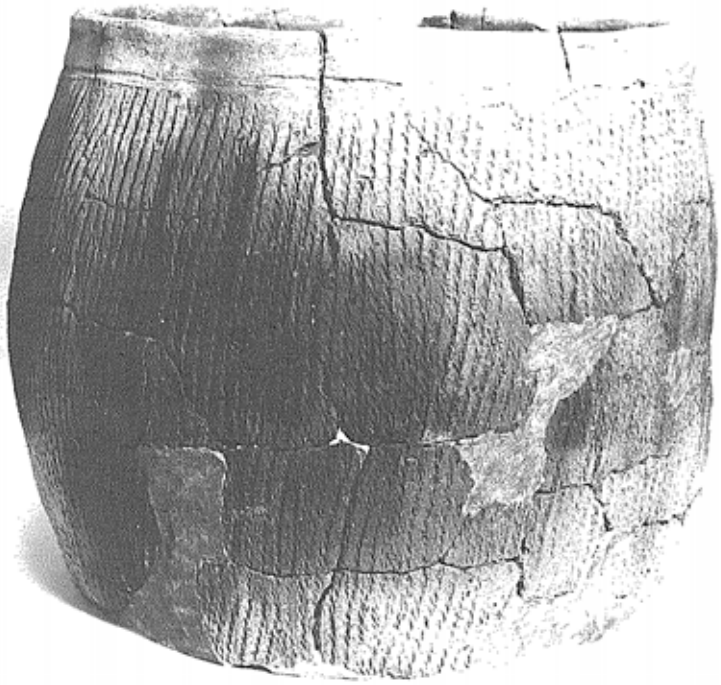


図版７　第２号住居跡出土土器

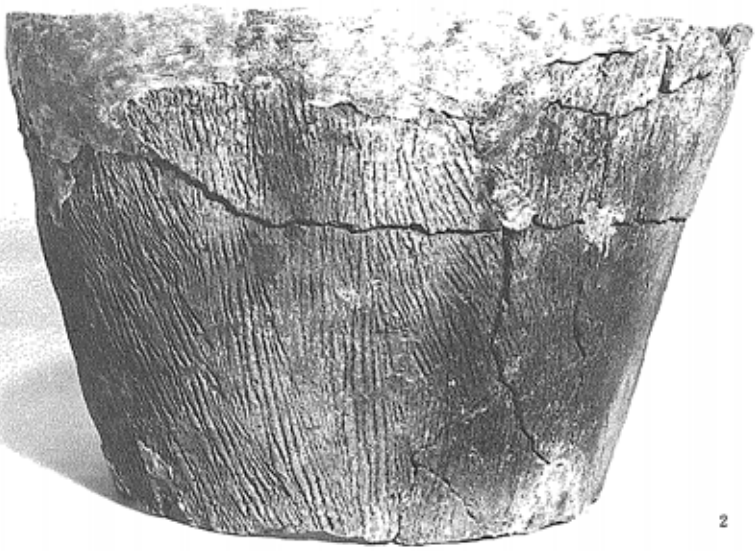


図版８　第１住出土土器(6)、第２住出土土器(1)

第３住出土土器（２・３）第８住出土土器(5)

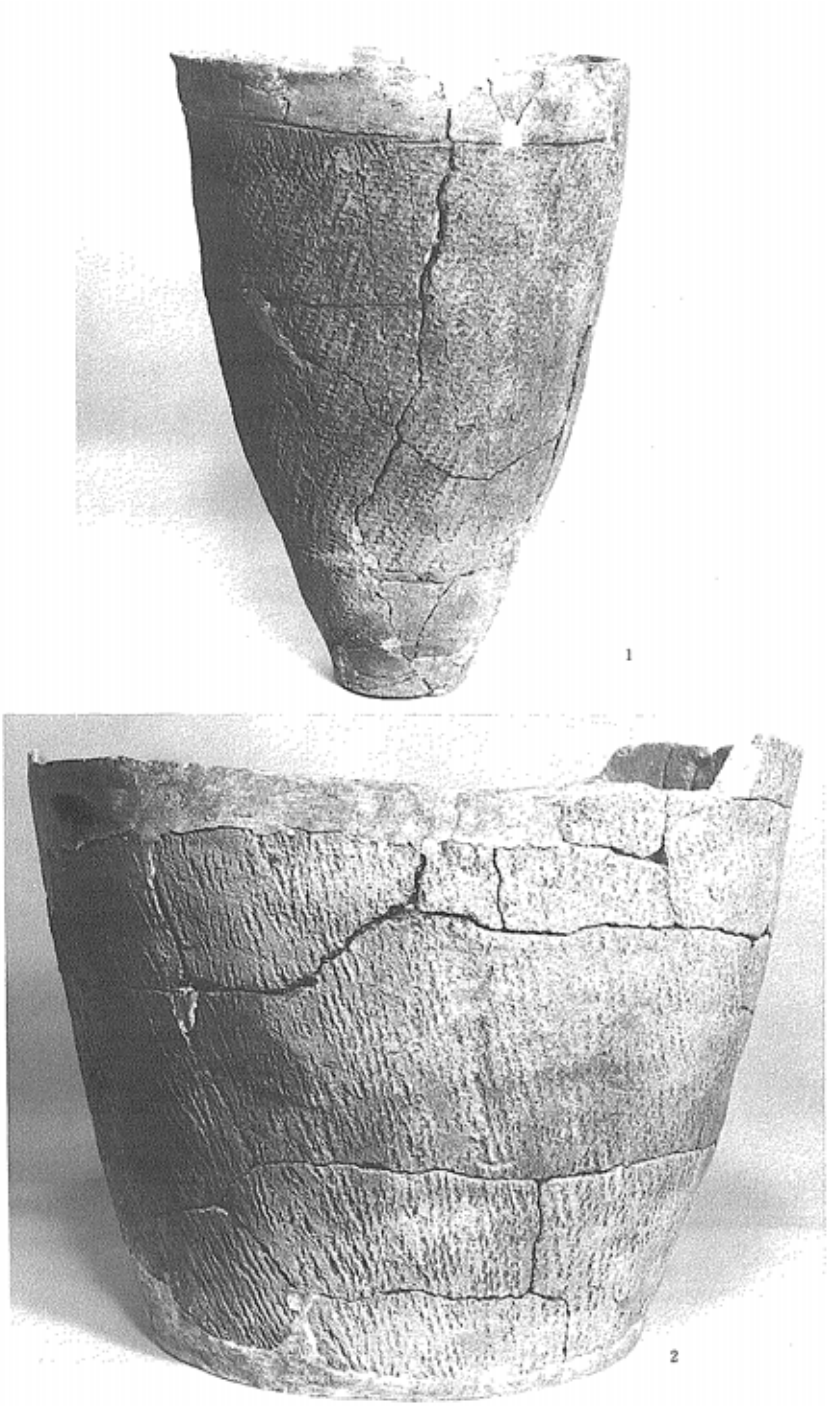


1



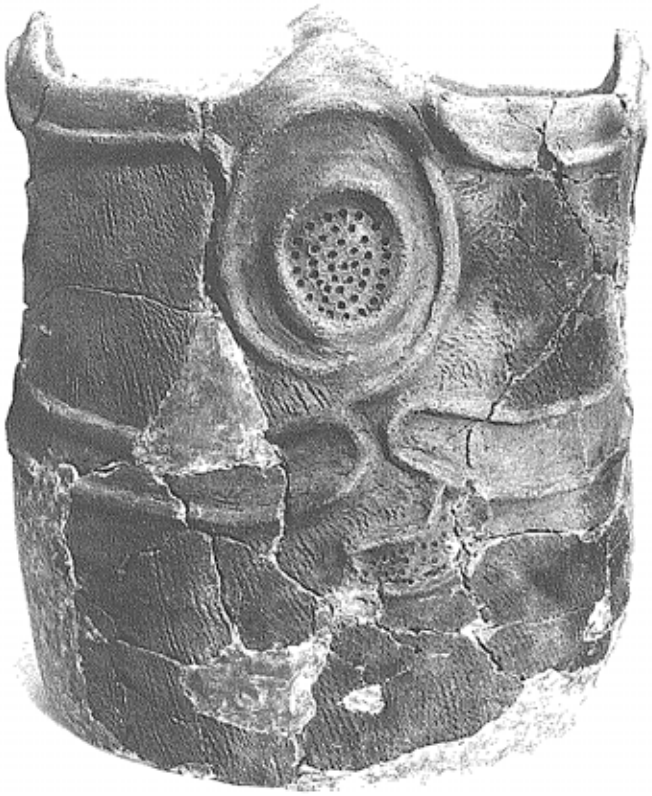
2

図版９　第３号住居跡出土土器



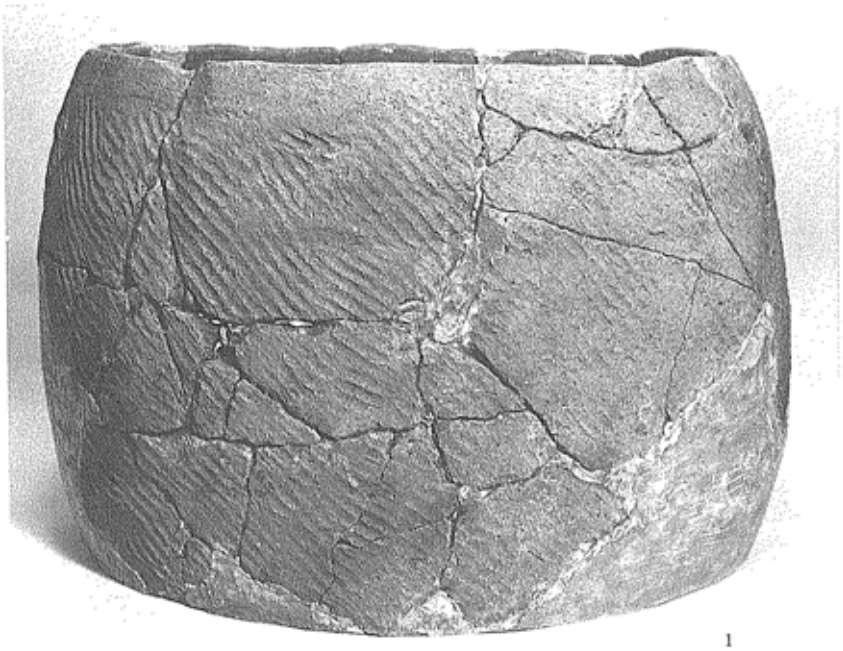
図版10　第４号住居跡出土土器

1



2

図版11　第５号住居跡出土土器(1)、埋設土器遺構(2)

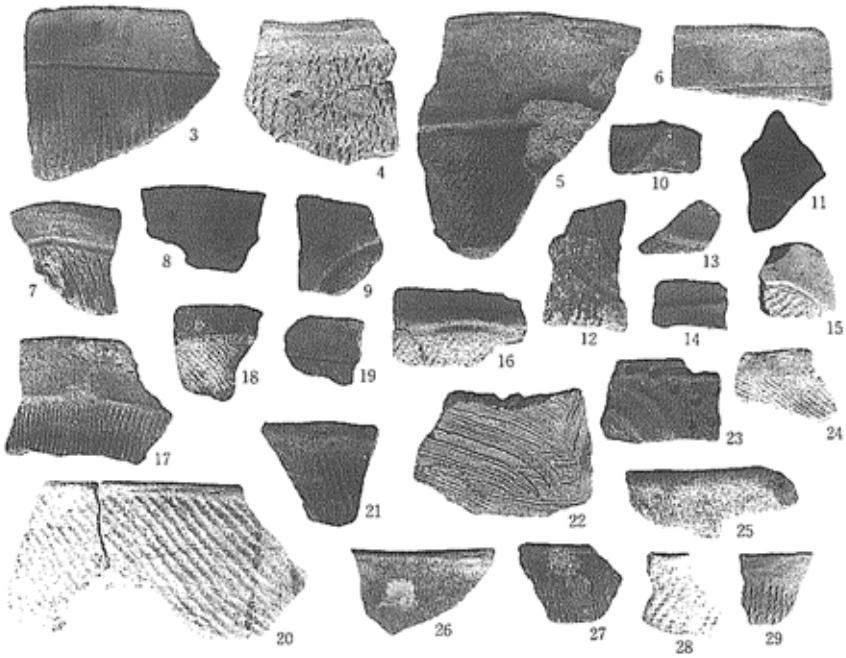


1

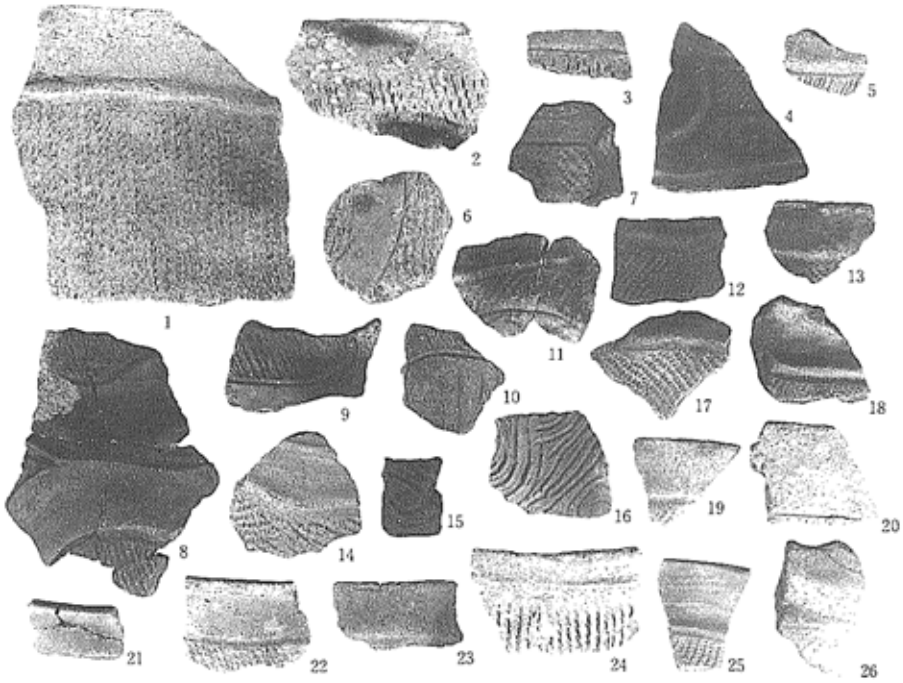
2

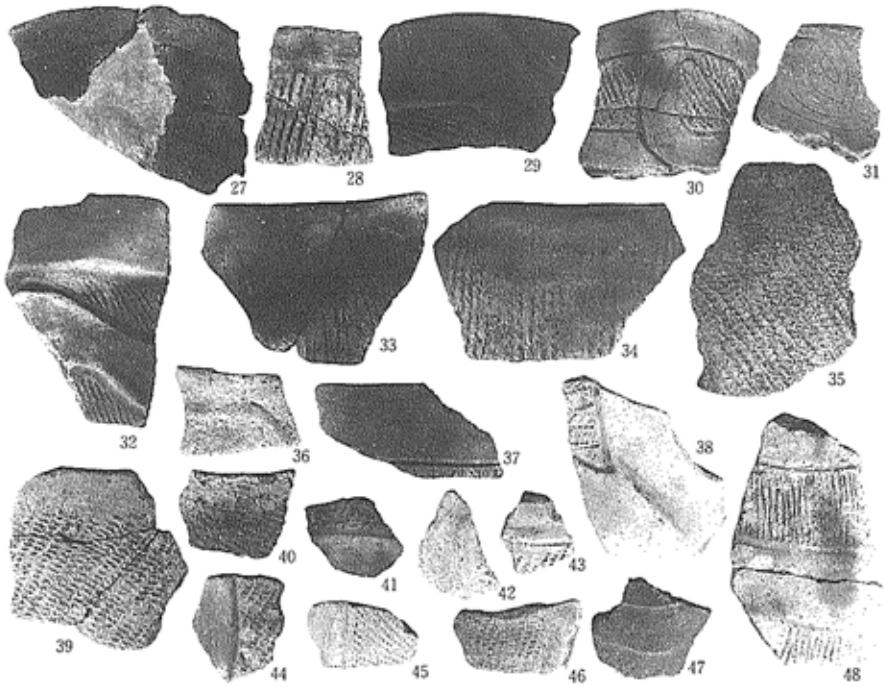
図版12　第１号炉(1)、第２号炉(2)出土土器

第1住　出土土器

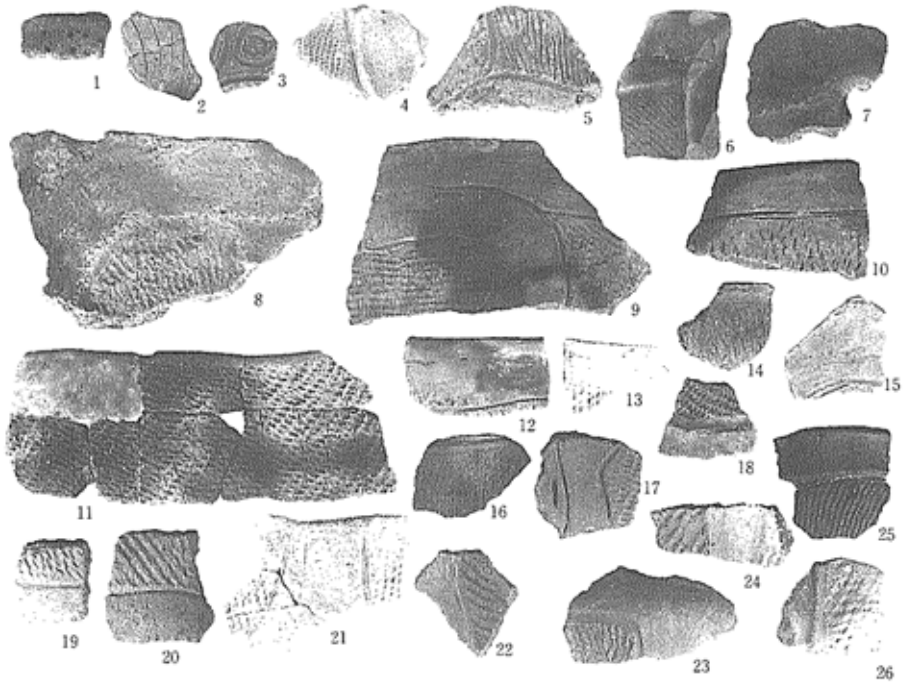


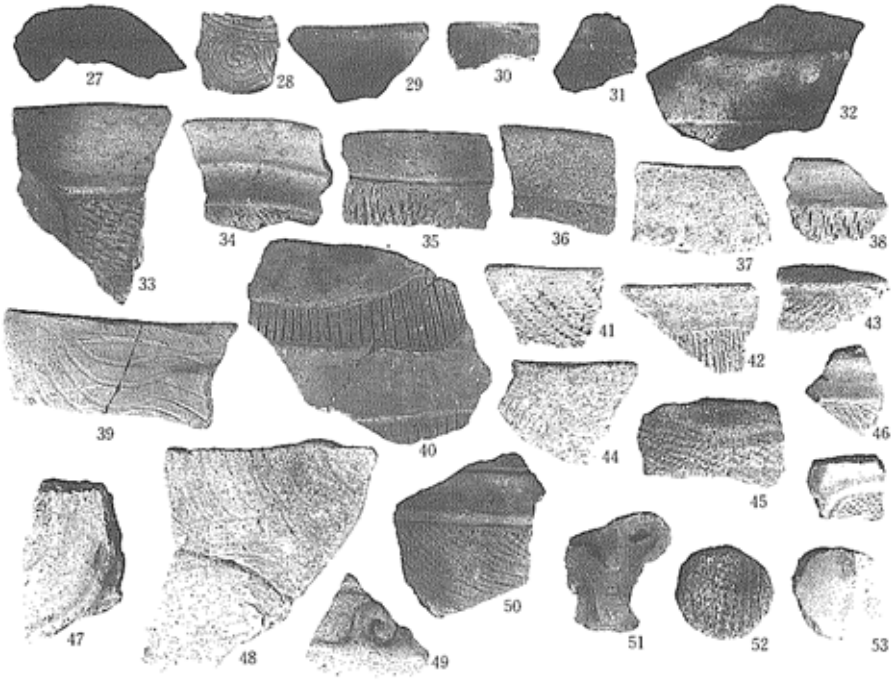
図版13



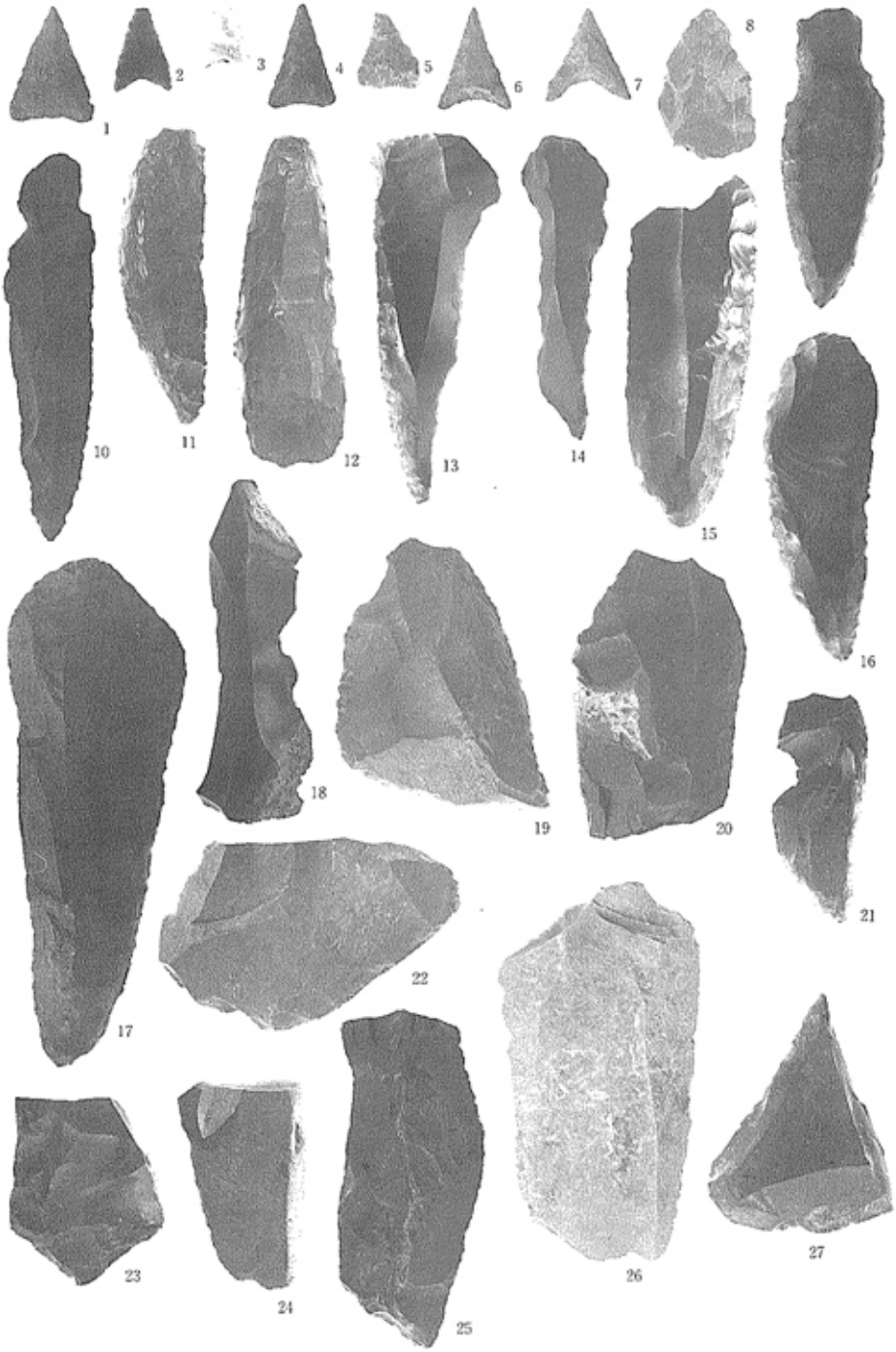


図版14

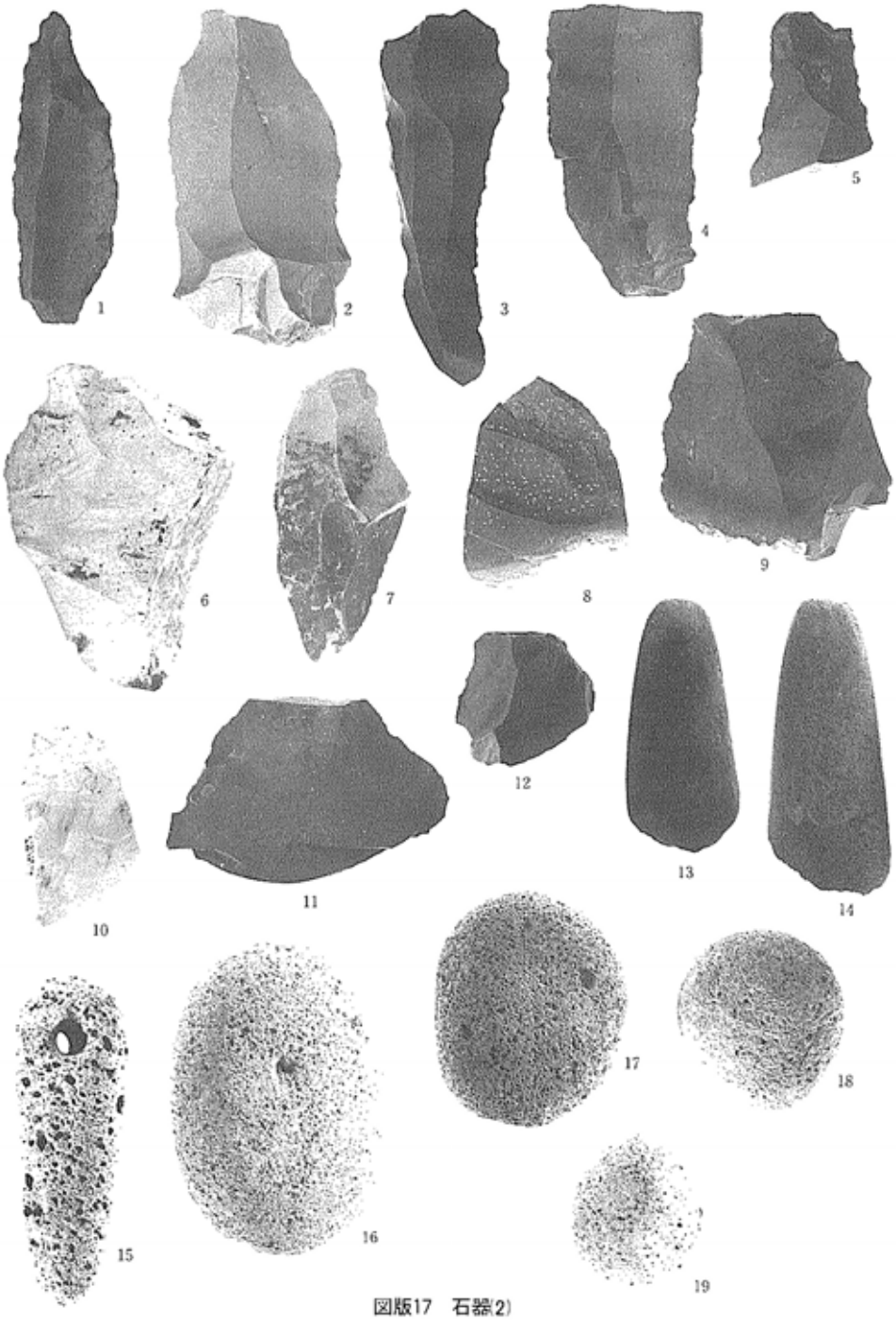




図版15



図版16　石器(1)



図版17　石器(2)